

宮崎学園都市 埋蔵文化財発掘調査概報

(Ⅱ)

1981

宮崎県教育委員会

**宮崎学園都市
埋蔵文化財発掘調査概報**

(II)

1981

宮崎県教育委員会

序

宮崎県教育委員会は地域振興整備公団の委託及び宮崎県土木部の依頼を受けて、昭和55年度から宮崎学園都市建設予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しております。昨年度は5号地、11号地遺跡の発掘調査を実施しましたが、昭和56年度は14号地、20号地をはじめとする5遺跡と石塔群についての発掘調査を実施し、あわせて遺物散布地についての試掘調査を行いました。本書はその概要報告であります。

本年度の調査では、弥生時代後期～終末期の方形周溝墓、さらに中世の周溝墓をはじめとし弥生時代中期から古墳時代の竪穴住居跡群、中世の掘立て柱など数多くの遺構が検出され、次第に大規模な遺跡群の存在が明らかになってまいりました。一方、出土遺物の面でも縄文土器、弥生土器など本県の各時代解明のため貴重な資料が出土するとともに、漆膜をとどめるだけではありましたか中世の漆器の遺存が確認されたことなどは特記すべき発見がありました。

なお、これらの貴重な調査の成果が学術関係者だけでなく、社会教育や学校教育の分野にも広く活用されると共に、文化財保護行政推進のための一助となることと期待いたします。

発掘調査にあたって深い御理解と御協力を示された地域振興整備公団及び宮崎市、清武町並びに関係者各位に深甚の謝意を表します。

昭和57年3月31日

宮崎県教育委員会

教育長 後藤 賢三郎

例　　言

1. 本書は、地域振興整備公団宮崎学園都市開発事務所の委託及び宮崎県土木部河川課の依頼を受けて実施した宮崎学園都市建設予定地内に所在する遺跡群の発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査には、県教育庁文化課岩永哲夫、面高哲郎、永友良典、北郷泰道、山中悦雄、菅付和樹が当った。
3. 本書の執筆は調査員が分担し、文責については文末に明記した。
4. 本書の編集は調査員で協議の上、岩永と北郷が当った。
5. 本年度の特別調査員として、炭化樹種同定を大塚 誠氏、漆器等の保存処理・指導を沢田正昭氏、古墳時代～中世集落跡発掘の指導を原口正三氏、ブラントオパール分析を藤原宏志氏、火山灰調査を町田 洋氏、23号地石塔群発掘の指導を水野正好氏にそれぞれお願ひした。記して深甚の謝意を表します。
6. また、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所、福岡県九州歴史資料館、福岡県教育委員会、大分県教育委員会、熊本県教育委員会、鹿児島県教育委員会の方々には資料の調査・照会について各種の御配慮・御助言を得た。記して深甚の謝意を表します。

本文目次

I	遺跡の立地と環境	(岩永)	2
II	調査の経過	(北郷)	3
1.	調査に至る経緯		3
2.	調査の経過		3
3.	調査の組織		4
III	調査の概要		5
1.	7号地遺跡	(岩永・面高)	5
2.	14号地遺跡	(菅付)	15
3.	15号地遺跡	(北郷)	23
4.	16号地遺跡	(山中)	27
5.	20号地遺跡	(永友・山中)	33
6.	23号地石塔群	(北郷)	49
IV	結語	(北郷)	51

挿図目次

第1図	遺跡所在地図	1
第2図	7号地遺跡遺構分布図	6
第3図	7号地遺跡竪穴住居跡実測図	7
第4図	7号地道跡出土繩文土器実測図・拓影	11
第5図	7号地遺跡出土遺物実測図	13
第6図	14号地遺跡A地区遺構分布図	17
第7図	14号地道跡A地区方形周溝墓出土土器実測図	19
第8図	14号地遺跡A地区出土線刻文漆形土器実測図・拓影	20
第9図	14号地遺跡A地区1号住居跡出土土器実測図	21
第10図	15号地遺跡遺構分布図	24

第11図	15号地遺跡住居跡及びピット群実測図	25
第12図	15号地遺跡出土糸切り底土師器実測図・拓影	26
第13図	15号地遺跡出土土器実測図	26
第14図	16号地遺跡遺構分布図	28
第15図	16号地遺跡周溝墓実測図	29
第16図	16号地遺跡内部主体実測図	30
第17図	16号地遺跡周溝墓出土土師器実測図・拓影	30
第18図	16号地遺跡周溝墓出土漆器丸実測図	31
第19図	20号地遺跡A地区遺構分布図	35
第20図	20号地遺跡A地区出土土師器実測図・拓影	37
第21図	20号地遺跡A地区出土陶磁器実測図	38
第22図	20号地遺跡A地区出土常滑大甕実測図	38
第23図	20号地遺跡B地区遺構分布図	41
第24図	20号地遺跡B地区2号住居跡出土遺物実測図・拓影	45
第25図	20号地遺跡B地区出土遺物実測図・拓影	46
第26図	23号地石塔群出土状態実測図(西区群の一部)	49
第27図	23号地石塔群出土土器実測図・拓影	50
第28図	23号地石塔群出土古錢拓影	50
第29図	14号地遺跡B地区試掘調査出土漆形土器実測図	52

図 版 目 次

- 図版 1 7号地遺跡礫群・礫群と朱石遺構
- 図版 2 7号地遺跡集石遺構・掘立柱建物
- 図版 3 7号地遺跡1号堅穴住居跡
- 図版 4 7号地遺跡1号堅穴住居カマド・1号堅穴住居跡坏出土状況
- 図版 5 7号地遺跡西端溝状遺構断面(南から)・(北から)
- 図版 6 7号地遺跡出土細文土器

- 図版7 7号地遺跡出土遺物
- 図版8 14号地遺跡A地区方形周溝墓及び1号住居跡発掘前状況・方形周溝墓遺物出土状況
- 図版9 14号地遺跡A地区1号住居跡及び出土線刻文点形土器・2号住居跡
- 図版10 14号地遺跡A地区光沢後の方形周溝墓及びピット群・全景（西から）
- 図版11 14号地遺跡A地区方形周溝墓出土遺物・1号住居跡出土遺物
- 図版12 14号地遺跡A地区方形周溝墓出土線刻文点形土器
- 図版13 15号地遺跡堅穴住居跡及び溝状遺構・出土土鏡
- 図版14 16号地遺跡周溝墓及び溝・周溝墓副葬土師器出土状況
- 図版15 16号地遺跡周溝墓出土土師器・同出土漆腹
- 図版16 20号地遺跡A地区全景（北から）・出土土師器
- 図版17 20号地遺跡A地区出土陶磁器
- 図版18 20号地遺跡B地区全景（北側）・同（南側）
- 図版19 20号地遺跡B地区2号住居跡・3号住居跡
- 図版20 20号地遺跡B地区4号住居跡・第1土塹
- 図版21 20号地遺跡B地区第2上塙第3下塙・集石遺構
- 図版22 20号地遺跡B地区2号住居跡出土遺物
- 図版23 20号地遺跡B地区出土遺物
- 図版24 23号地石塔群西区群全景・中央区群全景・出土糸切り底

- | | |
|------------|-----------|
| 1. 7号地遺跡 | 7. 5号地遺跡 |
| 2. 14号地遺跡 | 8. 11号地遺跡 |
| 3. 15号地遺跡 | 9. 木花古墳群 |
| 4. 16号地遺跡 | 10. 辻遺跡 |
| 5. 20号地遺跡 | 11. 若宮田遺跡 |
| 6. 23号地石塔群 | 12. 松ヶ迫塚跡 |



第1図 遺跡所在地図

I、遺跡の立地と環境（第1図）

宮崎学園都市建設予定地は、宮崎市大字熊野から清武町大字木原にまたがり、洪積台地を中心とした約300haの地域である。鋼塚山系の北東の末端部に位置し、南には加江田川が流れ、北には水田が広がり更に清武川が流れ、日向灘に注ぎ込んでいる。東には青島が遠望できる。加江田川と清武川に挟まれた一帯の遺跡は標高15mから30mの範囲にあり、学園都市遺跡及びその北部の水田にかこまれた地域に木花古墳群が所在している。

7号地遺跡は清武町大字木原に所在し、宮崎医科大学の東約500mに山頂を持つ丘陵の西麓付近にあたり、すぐ南に清武川に注ぐ小河川の田上川をひかえた南傾斜面に位置する。標高約26m、西の水田面との比高差約7mである。

14、15、16、20号地の4遺跡は、宮崎市大字熊野に所在し、いずれも宮崎市側の遺跡丘陵地の北端部に位置している。

14号地遺跡は、宮崎市側の遺跡のほぼ中心部にあたる。今年度の調査対象地は、北端部の限られた小面積であったが、北にわずかな水田と熊野川をひかえたゆるやかな北向きの傾斜地であった。標高約14m、北に熊野神社、南に加江田神社の所在する旧街道筋にあたる。

15号地遺跡は、14号地の北東約400mにあり、熊野川沿いの北傾斜面にある。旧状は傾斜地であったと考えられるが、耕作地にするための整地が行われ、現在は階段状になっている。熊野川沿いには狭い水田が営まれているが、水田面との比高差は約3m標高12~13mである。南には水田面が入り込み北西へ張り出した小独立丘陵状を呈している。

16号地遺跡は、15号地の100m程南東に位置し、南への緩傾斜地になっている。前面にはもと水田が営まれた湿地帯が入り込み、遺跡は湿地にまで広がっている。標高約13mである。

20号地遺跡は、北東に延びる舌状台地上にある。わずかに東傾斜を示すが、遺跡は舌状地全体に亘っている。北及び東には水田面が広がり、比高差7m、また南側台地との間に狭長な谷が入り込んでいる。標高約12mである。

23号地石塔群は、清武町大字木原に所在し、宮崎医科大学の南にあたる。背後には急峻な山がせまり、その北裾に石塔群は位置している。前面にわずかな低台地、田上川、対岸には低い山をひかえた山あいの遺跡で、標高は33~40mである。黒坂へ通じる旧軽肥街道筋にあたる。

(岩永哲夫)

II、調査の経過

1. 調査に至る経緯

宮崎大学を中心とする宮崎学園都市建設事業に伴い、昭和55年度から県教育庁文化課では発掘調査を実施しているが、昨年度は幹線道路建設予定地の11号地遺跡（第1次調査）、水路建設予定地の5号地遺跡を地域振興整備公団の委託、県河川砂防課の依頼で行った。

昭和56年度は宮崎学園都市建設局、地域振興整備公団と協議を進めた結果、14号地、15号地遺跡の水路建設予定地にあたる部分を県河川課（旧河川砂防課）から依頼を受け、また7号地、14号地、15号地、16号地、20号地の5遺跡と23号地石塔群の地域振興整備公団事業区域にあたる部分を地域振興整備公団の委託を受け実施することになった。

7号地、15号地については遺跡規模が小さかったこともあり完掘に至ったが、14号地、16号地、20号地、23号地石塔群については遺跡規模の大きさと遺構の広がる可能性から1次調査として本年度の調査を終えた。

また、昭和56年10月からは、分布調査で確認されている遺物散布地について試掘調査を実施し、縄文時代の大規模な遺跡地など良好な遺跡を確認している。

2. 調査の経過

発掘調査は試掘調査も含め昭和56年7月から昭和57年3月まで実施した。各遺跡は作付けの関係から当初は要則的な方法で着手せざるを得なかったが、調査方法は表土層の厚さに応じ表土剥ぎを重機で行い、地区設定は磁北に合わせ2×2mの小グリットを設定することにした。

発掘調査の日程と各遺跡の主調査担当者は次の通りであるが、実際は各遺跡の調査の進展に応じ調査員相互で協力し当たった。

（調査担当者）

①15号地遺跡	昭和56年7月20日～8月21日	北郷・山中
②16号地遺跡	昭和56年7月23日～11月18日	北郷・山中
③14号地遺跡	昭和56年8月13日～12月21日	北郷・菅付
④20号地遺跡	昭和56年8月31日～12月22日	永友・山中
⑤7号地遺跡	昭和56年11月19日～昭和57年3月30日	岩永・面高
⑥23号地石塔群	昭和57年1月11日～3月17日	岩永・北郷
⑦試掘調査	昭和56年10月17日～昭和57年2月17日	岩永・北郷・山中・菅付

3. 調査の組織

調査の組織は下記のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

調査指導 宮崎学園都市遺跡発掘調査委員会

（委員長）石川恒太郎（県文化財保護審議会委員）（委員）遠藤尚（宮崎大学教授、県文化財保護審議会委員）岡崎敬（九州大学教授）田中熊雄（宮崎大学名誉教授）田中琢（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長）寺原俊文（県文化財保護審議会委員）日高正晴（前同）森貞次郎（九州工業大学教授）柳宏吉（県文化財保護審議会委員）横山浩一（九州大学教授）

特別調査員 大塚誠（宮崎大学講師）沢田正昭（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室長）原口正三（大阪府立島上高等学校教諭）藤原宏志（宮崎大学助教授）町田洋（東京都立大学助教授）水野正好（奈良大学助教授）

事務局 宮崎県教育委員会

教育長 後藤賢三郎、教育次長 甲斐俊則、同 船木哲、文化課長 山本一麿、課長補佐 村田広則、庶務係長 島中勲、主任主事 穂之上昇、文化財係長 山下正明（調査員）主任主事 岩永哲夫、主事 面高哲郎、同 永友良典、同 北郷泰道、同 山中悦雄、同 背付和樹

調査協力 宮崎市教育委員会、清武町教育委員会

出土品整理 増田慈子、藤丸美代子、波辺祥子、日野美智子、菊野悦子

（北郷泰道）

III、調査の概要

1. 7号地遺跡

調査区の設定と概要

東西に長く発達する低丘陵南裾に標高約26m、幅約30mの小河岸段丘があり、7号地はその西端に位置する。遺跡の南側眼下には、清武川の支流である小河川が東流している。

調査は、土師器片の散布していた畠地の全面を発掘することにし、昭和56年11月19日から昭和57年3月20日まで実施した。

当地の層序は、第Ⅰ層耕土(20cm)、第Ⅱ層黒色土層(5~10cm)、第Ⅲ層砂質褐色土層(30cm)、第Ⅳ層アカホヤ層(10cm)、第Ⅴ層灰褐色土層となっている。第Ⅲ層で溝状遺構、掘立柱建物、竪穴式住居など平安時代の遺構、第Ⅴ層で縄文早期の集石遺構が検出されている。遺物は、これらの遺構に伴う土師器、須恵器、縄文土器が遺構周辺で出土している。この他、遺構は確認されていないが、第Ⅲ層で縄文前期の春日式系土器、弥生終末の甕、高环ミニチュア土器なども出土している。

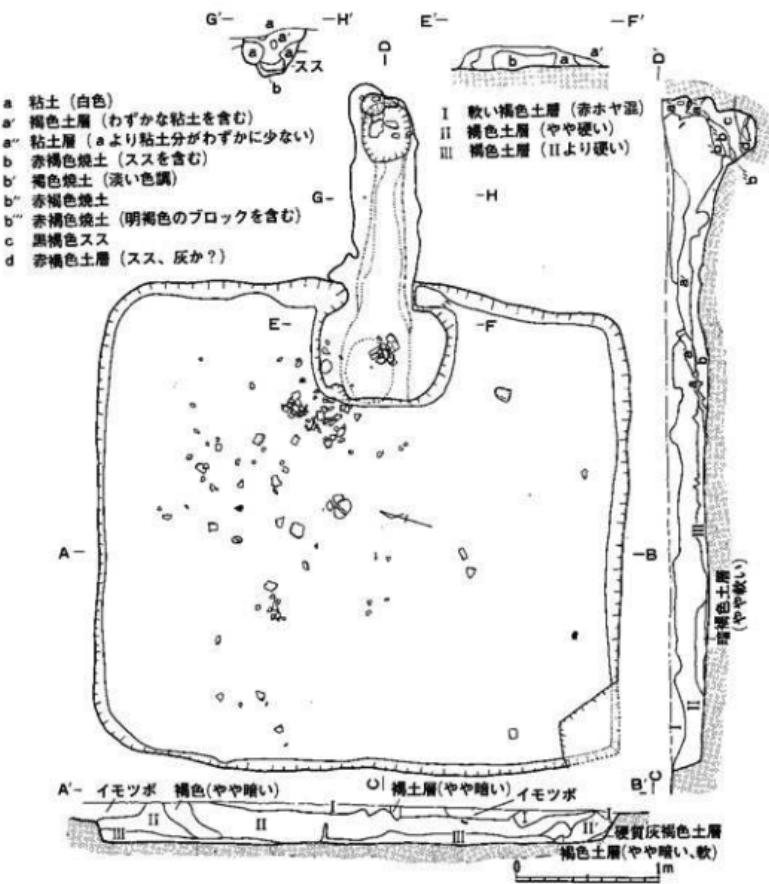
遺構(第2図、第3図)

第Ⅴ層で検出された集石遺構は、段丘南縁にある。焼けた拳大の角礫群が厚さ10cm内外の層をなして楕円状(長径18m)に分布し、その下に楕円形あるいは円形プランの土壇を伴う4ヶ所の集石遺構が確認されている。東の楕円形プランの土壇は、長径2m、短径1m、円形プランの土壇の径は1m内外が計測される。土壇内には焼けた拳大の角礫が詰まり、埋土は炭化物を若干含む黒褐色土である。

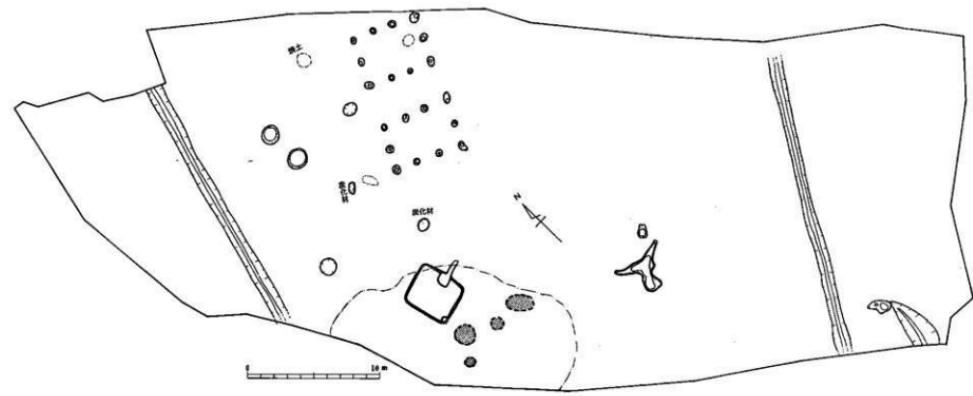
遺物は、礫群上あるいは礫群下部等において押型文(山形)、貝殻文土器などが出土している。

平安時代の遺構は、竪穴式住居1、掘立柱建物2、溝状遺構3である。

竪穴式住居(第2図)は、3.4m×3.6mの長方形プランで東壁中央部に乳白色を呈する粘土で築かれたカマドをもつ。カマドの本体は住居内にあり、天井部は崩れている。裾部は馬蹄形をなし、厚さは約20cmである。火床の幅は50cmで床面は深さ5cm掘り凹められ、中には多量の焼土の堆積が認められた。煙道は、住居外に掘られた幅45cm、長さ150cmの土壇内に粘土で造られ、その幅は約15cmである。煙道の床は東に向って低くなり、その東端にはスス溜め用かと考えられる掘り込みもみられた。遺物はカマド内及びスス溜めで土師器片が



第2図 7号地遺跡竪穴住居実測図



第3図 7号地道遺構分布図

出土している。

掘立柱建物は2棟発見されているが、いずれも2間×3間で1間は約1.8mである。柱穴は、径50~70cmで深さは40~60cmである。此の建物北東隅には径90cmの焼土があり、中央は若干凹んでいる。焼土内より土師器片が出土しているが、掘立柱建物に伴うものかどうかは定かでない。

溝状造構は、調査区の東西で3条発見されている。西端の溝は、段丘西縁付近を直線的に延び、上幅130cm、底幅30cmを計測される。現在、V字状断面をもつが、本来は上幅50cmほどのU字状断面でなかったかと推測される。埋土の下部は褐色系の色を呈し、上部に黒色土がレンズ状にのり、さらに上には、15世紀の火山灰と言われる黄灰色火山灰がのっている。東の直線的に延びる溝は、上幅80cm、底幅30cmでU字形断面をもつ傾斜急な溝である。南端付近の埋土は、下部に鉄分の薄い層を数層含む砂層があり、溝内からは磨滅の著しい須恵器片が出土している。この溝は、西端溝とほぼ平行に走行し、須恵器も出土しているが、時期については今後の検討を要する。

東端の溝は、断面形及び埋土より西端溝と同時期のものである。

(西高哲郎)

遺物(第4・5図)

縄文時代(第4図)

量的には少ないが、集石造構周辺から早、前期に属する土器群及び石器の出土がみられた。1、2は口縁直口の深鉢形土器で器厚は薄手である。施文部位は三区に分かれ、口縁端に刻目を行し、毎端下5cm内外にはヘラによる横調整の条痕が残り(この部分にはススの付着がみられる)、その下には縦・横・斜方向に細目の条痕が施されている。1の推定口径は26cmである。

3は口縁部片であるが、厚手の波状口縁上器と推定され、沈線によってU字状の画線を複数施し、狭い画線内に下から上への管状施文具による刺突文を一列配している。施文部位は器面調整、沈線、刺突文の順である。また、口唇部にも部分的に外面の文様に関連して沈線を有している。

4は口縁端に刻目を有し、その下には端正な縦方向の条痕を施した直口口縁部である。

5は若干内湾する口縁部で、口唇下約1cmの無文帶があり、浅い条痕文が縦走している。

6、7は押型文土器で、山形文に若干施文の乱れがある。6の口縁部の無文帶が特徴的で

ある。

8は、塞ノ神A式といわれるもので、撫糸文施文の薄手土器である。裏面の風化が著しい。

9、10は口縁が内湾するいわゆるキャリバー型の春口系統と思われる。9は口唇下に一条の沈線、その下に鋸歯状沈線が一条めぐっている。10は、口縁部から胴部にかけて沈線によって大胆な凹柄を配置した絵画性の強い波状口縁薄手土器である。波状部分に文様の強調を感じられる。胎土に滑石が含まれている。

出土土器は極めて少量ではあったが、それぞれ特徴的なものであった。出土層位は3層の褐色土層から5層の青灰色土層に亘り、早期から前期への大まかな変遷は把握可能である。

1、2、4、5、6、7、は早期、3、9、10は前期に比定できよう。10は前期末に比定される春口式に類似するが、口縁部屈折及び文様構成において若干後出のものではないかと考えられる。

(岩永哲夫)

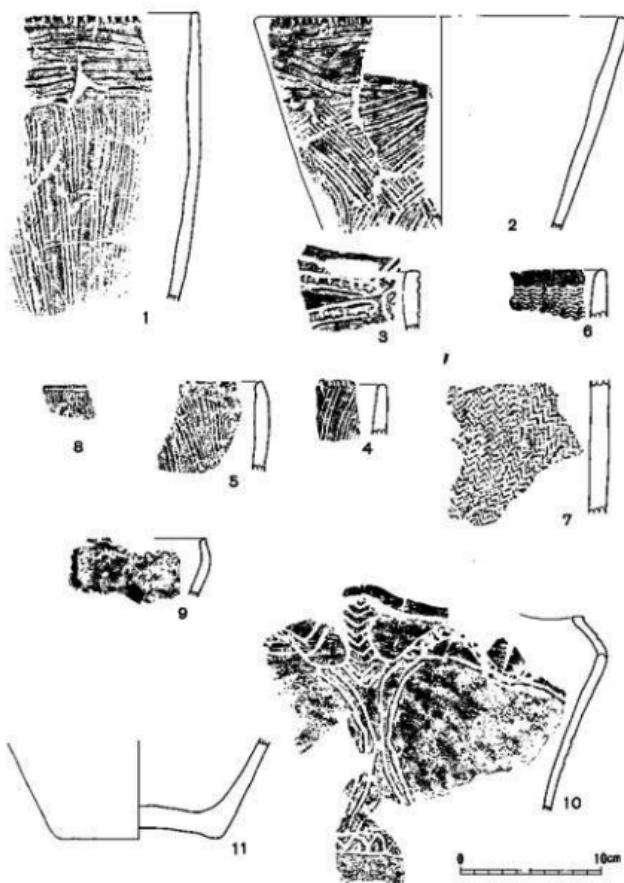
平安時代（第5図）

平安時代の遺物は、掘立柱建物周辺で多く出土している。

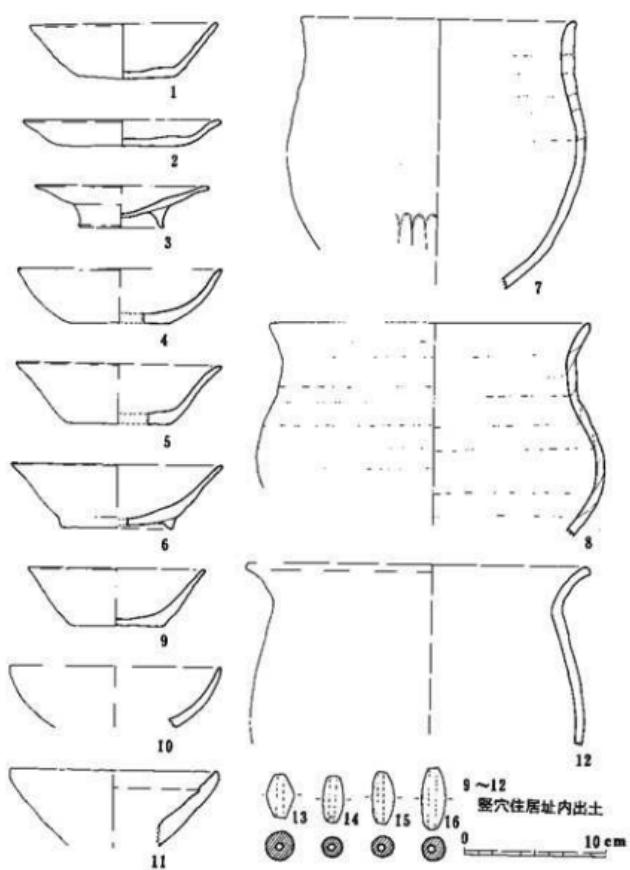
土師器は、壺、皿、甕等が出土している。7号地出土の壺、皿はいずれもヘラ切りである。第5図の1は、口径13.3cm、底径6.7cm、器高3.9cmの壺で体部は直線的に外上方へ延びる。2は口径14cm、底径8.4cm、器高1.9cmの皿で口縁部がわずかに外反する。3は高台付皿で口径12.3cm、底径6.1cm、器高3cmである。高台は高く、やや外へふんばる。4は内黒の土師器で口径14.4cm、底径7cm、器高3.9cmである。7は、口縁部が直線的に立ち上がり、端部がわずかに外反する甕である。口径19.2cmで最大径は胴部にあり20.1cmである。外面下半にケズリ、上半には調整痕である左上方への条線がみられる。肩部内面には粘土接合面が残る。8は巻き上げ技法で成形された甕で口径22.8cm、偏球形の胴部をもつ甕である。器面の調整は粗く、粘土接合面が明瞭に残っている。口径22.8cm、胴径24.7cm。7、8の甕形土器の胎土は、多量の砂が含まれている。

須恵器は、壺、壺、瓶、甕等が出土している。5は、口径14.5cm、底径4.3cm、器高4.3cmの壺である。6は高台付壺で口径15cm、底径8cm、器高4.6cmである。

13から16は土鍤である。13は、中央部が特に膨み、ソロバン玉状をなすが、大半は14のごとく中央がわずかに膨むタイプである。なお、土鍤は北の掘立柱建物内で多く出土している堅穴住居内の出土遺物は、掘立柱建物周辺の遺物と同種のものである。遺物は、カマド南



第4図 7号地遺跡出土縄文土器実測図・拓影（縮尺1/4）



第5図 7号地遺跡出土遺物実測図（縮尺1／4）

及び西周辺で多く出土している。9は、口径12.6cm、底径6.4cm、器高4.1cmの杯で、内底に「大」の刻字がみられる。10は、口径15cmの内黒土師器である。11は、口径14.9cmの布痕土器で口唇部は外方へそぎ落され、体部には成形時の凹凸もみられる。12は、口縁部が大きく「く」の字形に外反する甕で口径24.5cmである。

掘立柱建物周辺及び竪穴住居内から出土した遺物は、その特徴から平安時代前半に比定されるものと考えられる。

(面 高 哲 郎)

ま と め

7号地遺跡は、相当な削平を受け、面積的にも小範囲であったが、縄文早期から平安(9世紀頃)の長期に亘る遺構遺物の検出をみて、時代的には断続的であるものの営みの場として良好な地であったことを確認することができた。このことは地理的に近接している5号地⁽¹⁾遺跡の内容とも共通している。

まず、縄文早期の集石遺構であるが、遺跡の中央南側に角礫を一面に敷き詰めた礫群の中に数基の集石遺構がみられた。これらの集石遺構は5号地においても3基検出されたが、周囲の礫群との関連で相異点をもつ。周囲の礫群について、集石遺構(土塗)を内に包含し、その周間に敷き詰めた平面構造は一つの遺構として認定することにより、石蓋⁽²⁾の機能に加えて更に別の性格も与え得るのではないか。他遺跡での検出例とも比較検討する課題が与えられたと言えよう。

次に、南九州の早・前期の時代区分に関してであるが、アカホヤ層堆積を転換期として、下層出土の吉田式・前平式・押型文土器等を早期、上層の轟式・曾畠式を前期とする区分については、型式論からの追求からみても大体において妥当性を持つものと言えるが、南九州を中心として全九州的に分布する前期の様相を呈する塞ノ神式土器の多様性をいかに早期的性格の中に位置付けられるかは時期設定の定義とも関連して今後の課題として残さざるを得ない。

また、9世紀頃に比定される竪穴住居跡を1基検出したが、機能的・形態的に完成した段階とみられるカマドを有する住居跡として県内では初めてのものであった。カマドの付設された例としては、8世紀前葉から中葉にかけて構築されたと考えられる浄土江遺跡の304号住居跡があるが、それに後続するものとして本県の奈良から平安時代にかけての住居形態の変遷上注目すべきものがある。

その他、2間×3間の建物跡が2軒分、更に炉跡の存在から1軒分計3軒分の建物跡、また北から南への溝状造構などが検出されたが、出土遺物の検討とも合わせ、本報告において詳述する予定である。

(岩永哲夫)

註

- (1) 「5号地遺跡」『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概要(1)』宮崎県教育委員会 昭56.3.31
- (2) 新東晃一「火山灰からみた南九州細文早・前期上器の様相」『鏡山猛先生古稀記念古文化論叢』昭55.
- (3) 「淨上江遺跡」『宮崎市文化財調査報告書第6集』宮崎市教育委員会 昭56.3.31

2. 14号地遺跡

< A 地区 >

調査区の設定と概要

調査を行うにあたり、14号地遺跡の中央を南北に走る市道熊野～車坂線を境に東側をA地区、西側をB地区（北側畠地）、C地区（南側畠地）とした。そのうち本年度はA地区の発掘調査を行い、B・C地区については、次年度以降の調査のために試掘を行った。

A地区は標高約14mの台地上に位置し、北側は浅い谷を挟んで小河岸段丘が対峙している。トレンチによる試掘を行ったところ、南半分の畠地は既にアカホヤ層まで搅乱や削平を受けていたため、遺構の残存が確認された北側畠地についてのみ面的発掘を行った。この北側の畠地でも削平は進んでいたが、中央の低地部分に黒色土の落ち込みが確認され、また、その西方に周溝墓、そして北方には住居跡がアカホヤ層上面に薄く黑色土が堆積した状態で検出された。そこで中央低地の黒色土層にトレンチを入れ黒色土を除去していくところ、中央より東側にかけて3本の溝状遺構が検出され、さらに周溝墓の南側にあったピット群を精査したところ、4対の柱列が検出された。A地区的北側河岸段丘下の河川予定地にあたる所では、数本の溝状遺構が確認された。

包含層の状態

A地区における基本的層序は、既に発掘調査の終了した5号地遺跡・11号地遺跡（一次）⁽¹⁾と同様であり、縄文時代前期以降の包含層である黒色土層或いはその下のアカホヤ層上面までを耕作等により削平されていた。北側畠地中央の浅い谷地形には黒色包含層が残っており、周溝墓や住居跡、溝状遺構などは、アカホヤ層上面で黒色土の落ち込みとして検出された。中央谷地形の黒色土層からは、高环脚部片や土鍤、複合口縁盃と思われる手捏ねミニチュア土器片、銅鏡、陶磁器片等広い時代にわたる遺物が出土している。アカホヤ層及びその下の硬質褐色土層からは遺物は出ていない。

註

(1) 『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報（I）』1981年3月 宮崎県教育委員会

遺 構（第6図）

検出された遺構は、方形周溝墓、住居跡、遺状遺構、掘立柱建物跡である。

方形周溝墓は、東側が円く西側の角張った周溝を有し、アカホヤ層下硬質褐色土層まで掘り込まれていた。約7m10cm×6m5cmの大きさで主体部は見られない。全体的に中央谷地形の方へわずかに傾斜している。供獻土器の殆どは南側の周溝内から出土した。この方形周

溝墓の南側の畠地は攪乱等を受けていたため、他に周溝墓は確認出来なかった。

東側の1号住居跡は5m70cm×5m55cmの不整形な五角形を呈し、硬質褐色土層下粘質明褐色土層まで掘り込んでおり、アカホヤ上面からの深さは壁面近くで30cm、中央部で50cmであった。中央部には約5cmの深さで灰が堆積しており、壁際には硬質暗褐色土のブロックを含む堅い突出部が3ヵ所見られた。床面を精査したにもかかわらず、柱穴は検出出来なかつた。土器は中央部分を中心に出土した。

西側の2号住居跡は、既にかなり削平されていたために床面上10数cmが残されていたにすぎない。3m40cm×2m90cmの隅丸長方形をなす。細い炭化材が、全面に広がって残っていた。また、中央部は窪み、その東側に焼土の堆積が見られた。床面精査の結果、柱穴は検出されなかつた。土器の出土は極めて少ない。

溝状造構は、1号住居跡の東側と北側低地に検出された。東側の造構は中央の谷地形の方へ傾斜している。これら溝状造構は土器の出土が殆どなく、アカホヤ層或いは硬質褐色土層まで掘り込まれていた。

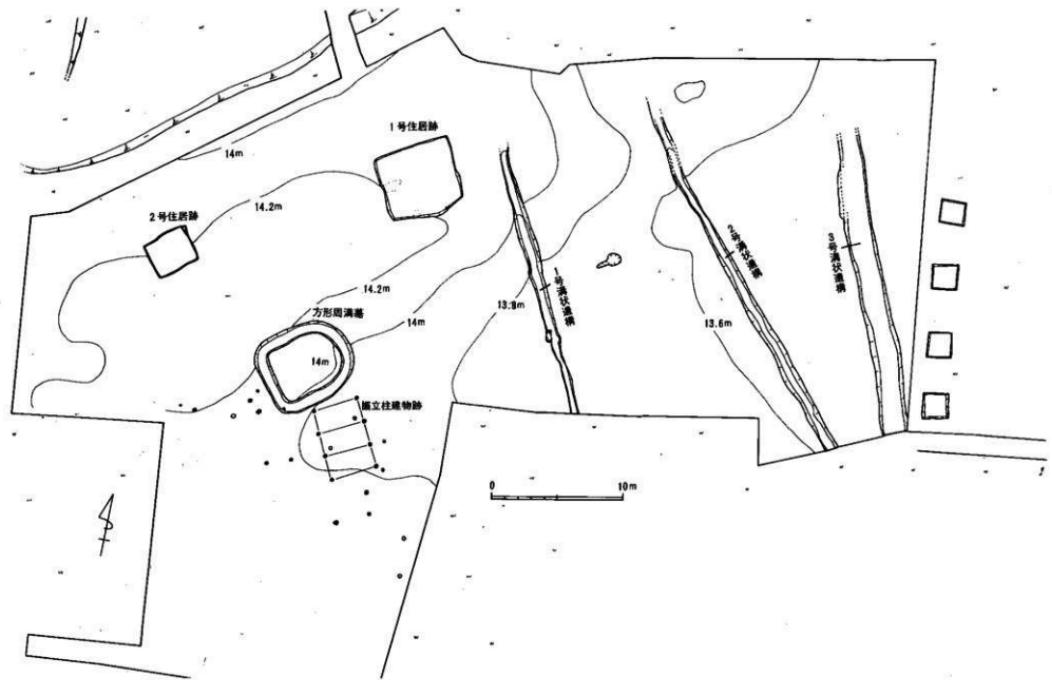
掘立柱建物跡は、1間×3間（柱間約3m45cm×5m30cm）でいずれも硬質褐色土層まで掘り込まれている。アカホヤ上面からの現存の深さは20~30cmである。柱穴に伴う遺物の出土はない。

遺 物（第7図～第9図）

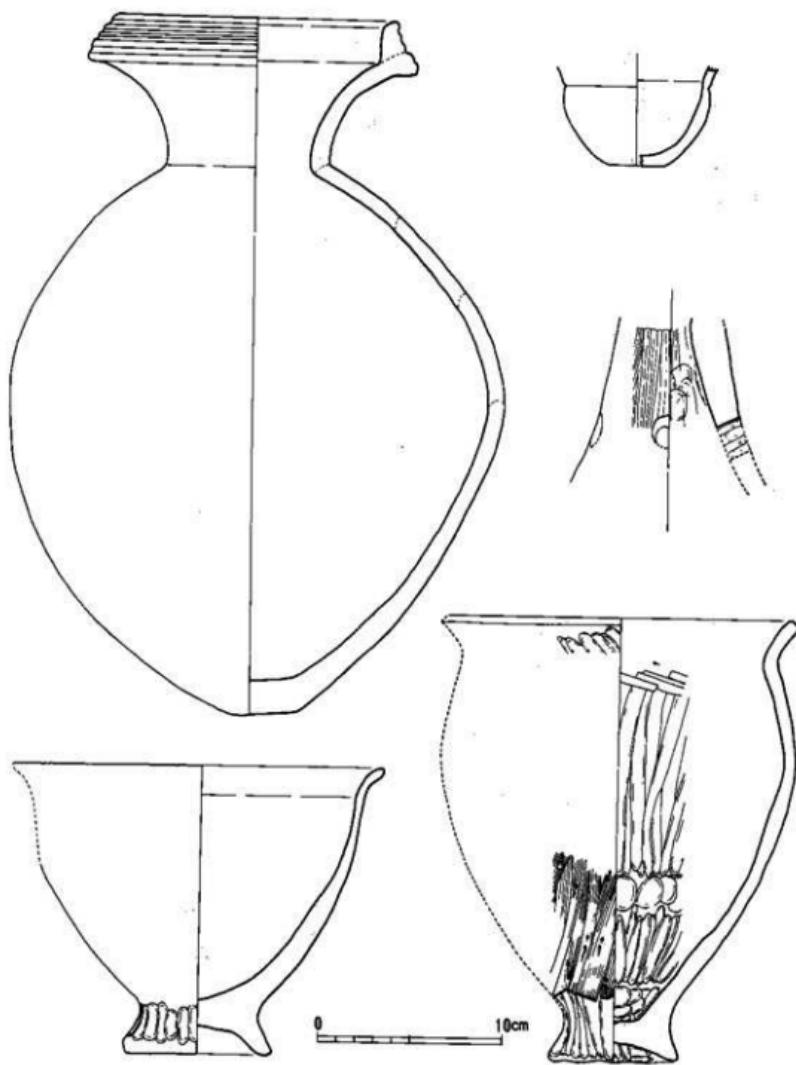
遺物は主に方形周溝墓、1号住居跡、2号溝状造構及び黑色土層中から出土した。このうち2号溝状造構からは、須恵器や陶器の細片、鉄滓等が出土している。

第7図は方形周溝墓の周溝内出土の土器である。ヘラ磨きの高環脚部以外は1mm~数mm角の砂粒を多く含んだ胎土であり、淡赤褐色から淡黄褐色を呈す。焼成はいずれも良好であるが、表面の風化が著しい。方形周溝内出土の土器は、直径40cm前後の壺を含む壺形土器が4個体以上、壺形土器が6個体、鉢形土器が1個体、高环片が1個であった。壺形土器には線刻のある完形土器（第9図1、2）がある。線刻は半截竹管を用いたものと考えられる。この周溝内出土の一部の土器の胎土には、暗赤褐色の青玉状の土製物質が混入される。これは20号地遺跡B地区出土の一部の土器にもみられるものである。

第8図は1号住居跡床面付近から出土した土器である。いずれも淡黄褐色から淡褐色を呈する。また、線刻のある壺形土器（第9図3）も出土している。これらは全て1mm~2mm角の砂粒を含み、焼成は良好である。



第6図 14号地遺跡A地区遺構分布図



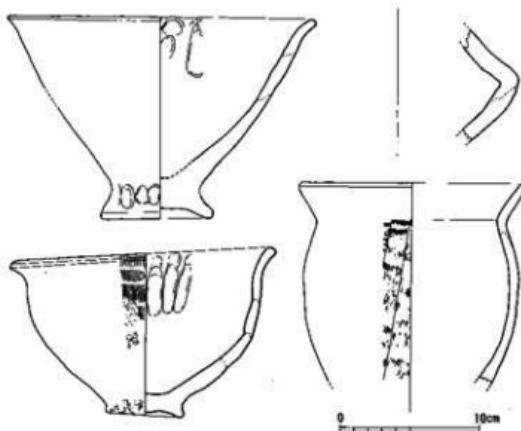
第7図 14号地遺跡A地区方形周溝窯出土土器実測図（縮尺1/3）

まとめ

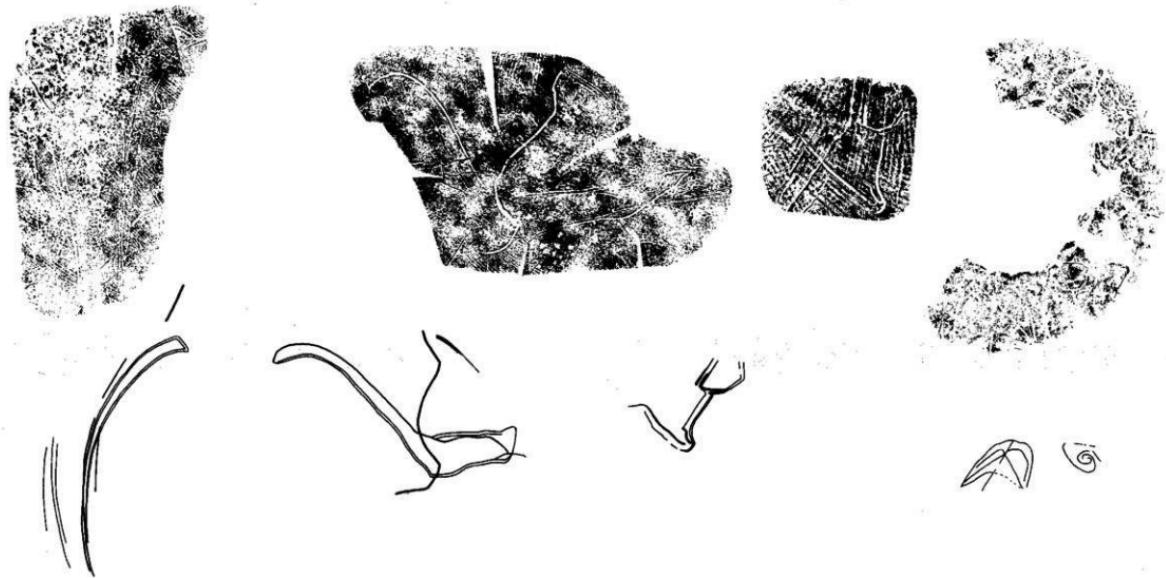
14号地遺跡A地区は、半分以上をアカホヤ層まで攪乱若しくは削平され、遺構は稀少であり、北側に辛うじて残存していた。しかし、遺構本来の包含層である黒色土層は、谷地形の低地及び遺構内に残るのみであり、プライマリーな状態での遺構面の検出は望めなかった。方形周溝墓は1基検出されただけであるが、群集する例から見てこの周辺に存在が期待される。宮崎平野周辺では初見である。また、県内の周溝墓と比しても特異な形態をしており、類例を待ち検討したい。出土遺物から、1号住居跡は東方600m程の20号地遺跡の住居跡群との関連がうかがえ、また、方形周溝墓と比べると若干先行する時期に営まれたと考えられる。

14号地遺跡の全体的な性格については、B地区、C地区の調査を終了した後に十分な検討を加えるとして、A地区の主な遺構残存部について言うならば、時期的には弥生時代の終末あたりに比定出来そうである。県内では最近、この時期の遺跡の発掘例が増えてきたものの未だ様相がつかめる程多くはなく、今後の発掘例ともあわせて検討してゆきたい。

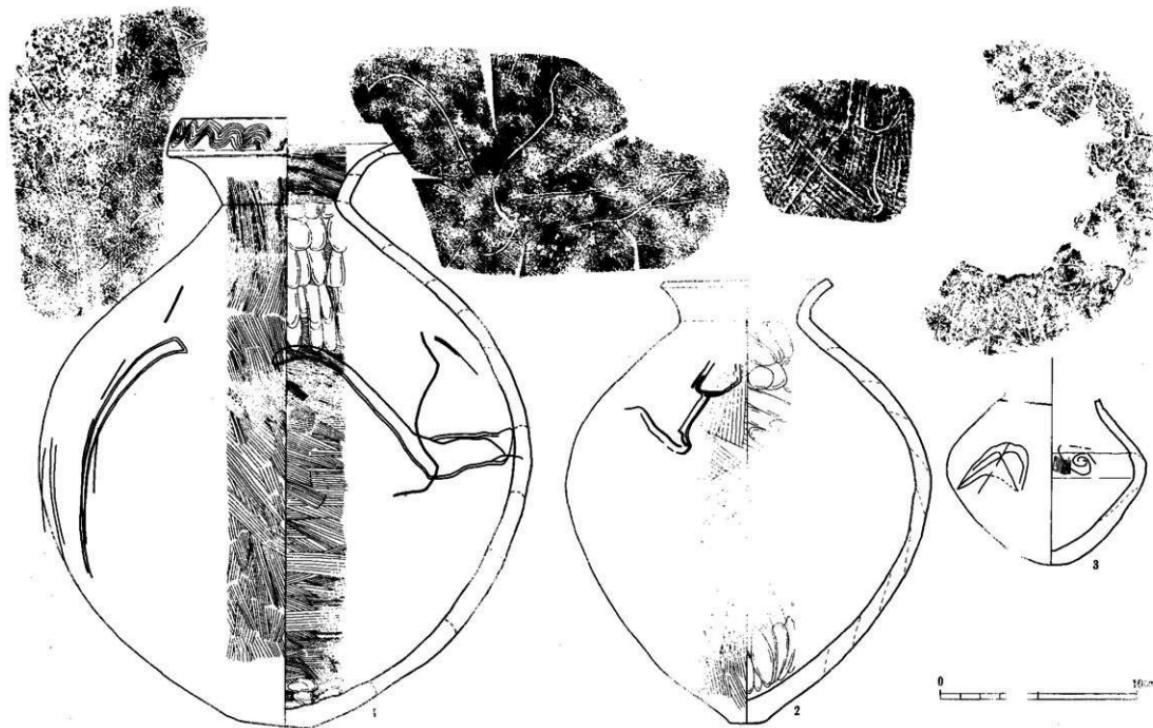
(菅付和樹)



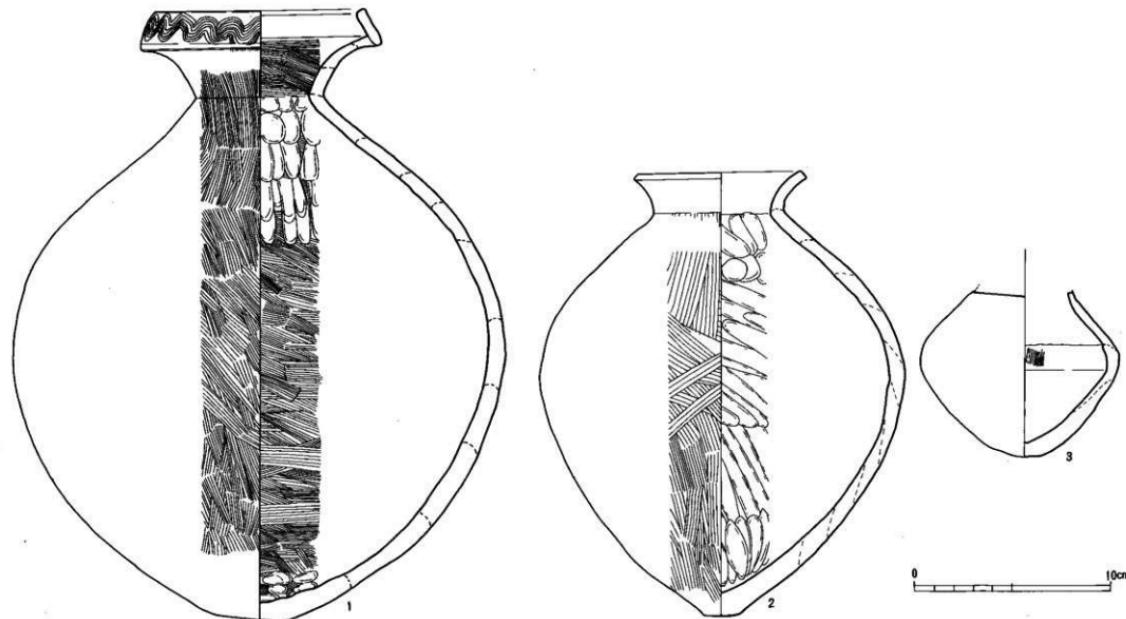
第8図 14号地遺跡A地区1号住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)



第9図 14号地遺跡A地区出土線刻文壺形土器実測図・拓影 (縮尺1/2)



第9图 14号层地被植物化石拓片 (1/2)



第9図 14号地遺跡A地区出土縞刻文壺形土器実測図・拓影

3. 15号地遺跡

調査区の設定と概要

調査の対象としたのは、北向きの傾斜地を開削した二段に分かれる畠地である。調査は磁北にあわせグリットを設定し、上段の畠地（A地区）から開始したが、畠地の南側はすでにアカホヤ層が削平され、北側に向け比較的急峻なアカホヤ層の傾斜が確認された。遺物としては、土師器片、陶磁器片、土鍤等が出土したが、いずれもプライマリーな状態を保つものではなかったため、北側の下段の畠地（B地区）に調査区を拡張することにした。B地区はアカホヤ層上位の層までが削平を受けていたが、柱穴群、溝状遺構、縦穴住居跡、方形にめぐる溝状遺構などを検出することが出来た。

遺構（第10図・第11図）

縦穴住居跡はB地区東端に検出された。東西幅245cm×南北幅255cmを測り、アカホヤ層削平面からではあるが深さは最深部で19cmを測る。住居跡内には10箇の柱穴が確認されている（第11図）。遺物としては、糸切り底の土師器小皿片、須恵器片などが出土しているが、いずれも細片であるためその特徴など詳細をきわめない。

方形にめぐる溝状遺構は住居跡の西1m程の地点に検出され、埋土中からは住居跡と同様糸切り底の环片が出土している。東北幅約270cmで南北幅は推定で400cm程度である。又、溝幅は20cm～40cmで、深さは掘り込み面が著しく削平されているため5cm内外の窪みを確認出来るだけである。

溝状遺構は南西～北東に調査区を横断して検出されている。又、調査区南辺にも枝別れする溝状遺構を確認しているが、いずれも削平のためその形状等明らかとはいいがたい。

柱穴群から復元される掘立柱建物は1棟で、桁行3間×梁行2間の切妻造りのものである。

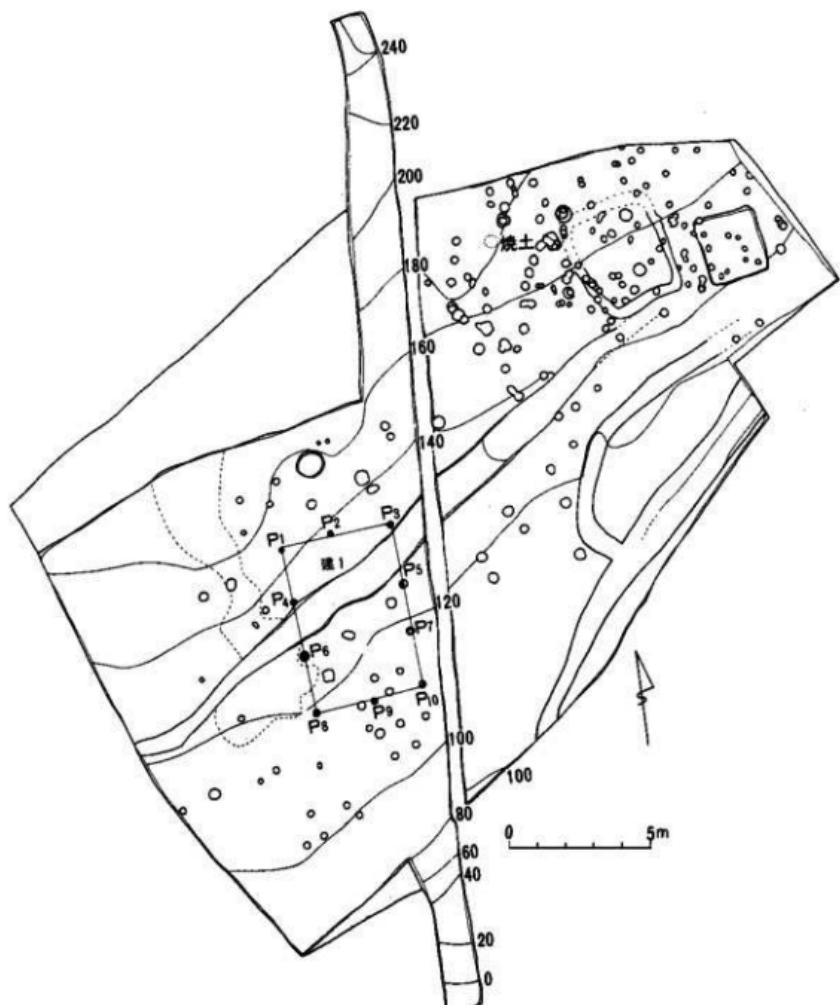
1間の長さは、ややふぞろいの感があるが2m程を測る。桁行の方向は南北にあり、柱穴の大きさ、深さなどもふぞろいである。

他に、方形にめぐる溝状遺構の北西約2mに焼土面が確認されており、焼土中からも糸切り底の土師器小皿片および环片が検出されている。

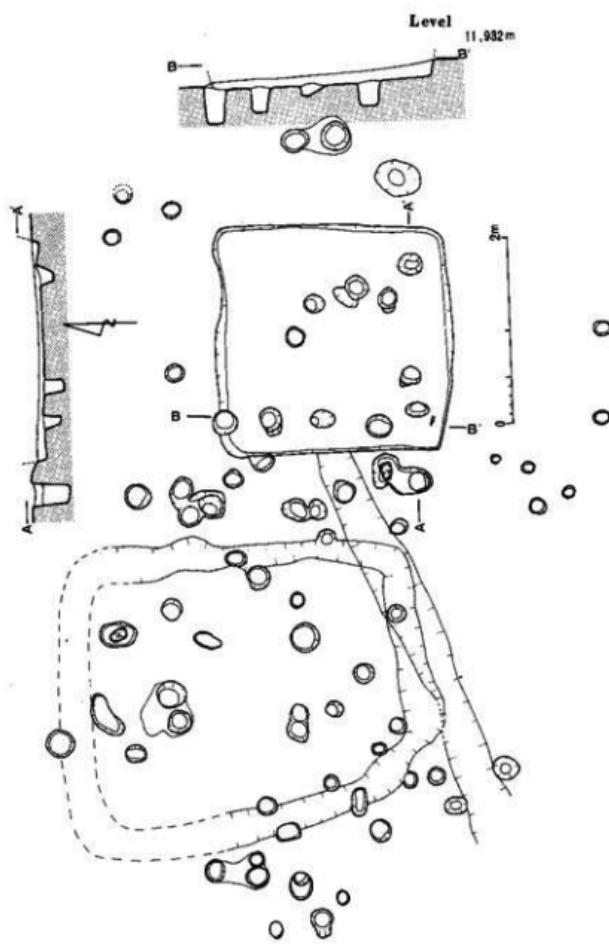
P ₁	14 cm	P ₂	22 cm
P ₃	16 cm	P ₄	14 cm
P ₅	18 cm	P ₆	22 cm
P ₇	33 cm	P ₈	25 cm
P ₉	44 cm	P ₁₀	23 cm

表 柱穴の深さ一覧

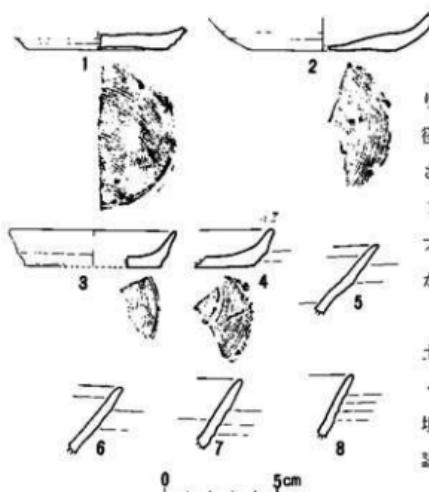
(注：アカホヤ層削平面から)



第10図 15号地遺跡遺構分布図



第11図 15号地遺跡住居跡及びピット群実測図



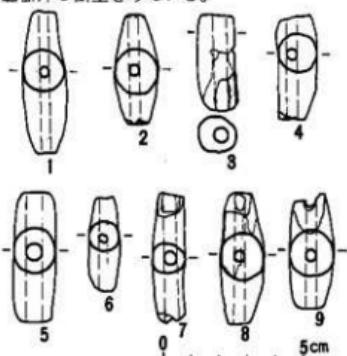
第12図 15号地遺跡出土糸切り
底土師器実測図・拓影

遺物 (第12図・第13図)

出土した土師器の外及び小皿はすべて糸切り底である。第12図 1は底径 6.2 cm、2は底径 6.4 cm、3は口径 7.4 cm、底径 6.1 cm、高さ 1.7 cm をそれぞれ測る。又、4も高さを 1.7 cm と計測し、3と同じ法量比をもつタイプと考えてよい。5~8は环の口縁部であるが、口径は計測し難い。

土錘 (第13図) は A 地区、B 地区ともに出土している。土錘両端を平坦にカットした 3・4・5・8・9 のタイプと、カットした平坦面をもたない 1・2・6 の二種のタイプが認められる。

他にいざれも破片ではあるが、須恵器片、陶磁器片の出土をみている。



第13図 15号地遺跡出土土錘実測図
(縮尺 1/2)

まとめ

15号地遺跡の遺構の遺存度は、畑地開削のためあまりかんばしいものではなかった。年代としては糸切り底土師器のたどり得る特徴から14~15世紀を大きくはずれることはあるいはまい。同じ台地上に近接して確認されている16号地、20号地遺跡とともに面的広がりをもち中世の集落跡及びそれに関わる遺構が同台上に展開されることが明らかとなった意義は大きく、畑地開削の著しい削平がみられるものの周辺地に遺構の確認される可能性は強く、その全体像の把握は今後の課題としたい。

(北郷泰道)

4. 16号地遺跡

調査区の設定と概要

55年度試掘の結果、3本の溝が確認されていたので、磁北を基準として2mグリッドを設定した。最終的には、周溝墓上を通る南北壁を残し調査区を全面発掘することにした。調査区南側で周溝墓を検出したので、調査区を東西に拡張した。その結果、他の周溝墓は確認できなかったものの建物3棟を検出することができた。

包含層の状態

単純化すれば4層にわけることができる。地表下30cmほどまでは耕作土で平坦な面を形成する。第2層には淡黒褐色砂質層があり、この層から南へ下がる傾斜を示している。3層は、北半では赤ホヤ下層の黄褐色層で、南半では暗黒褐色土である。この層の下には黒色土層がみられ、溝や周溝墓埋土は、基本的にはこの黒色土層である。黒色土の下には南半では赤ホヤがあり、遺構はこの面で確認することができる。16号地は北半を削平し南半部に客土したことわかる。

遺構（第14図～第16図）

周溝墓

周溝を、ほぼ東西南北方向に持ち、東西約5.9m、南北約5.4mの略方形を呈する。周溝幅は、東辺で約80cm、深さ約30cm、南辺で約60cm、深さ18cm、北辺で約1.1m、深さ約31cmをはかるが、西辺部分では高さ約50cmの削り出し状を呈する。

主体部は台状部中央よりいくぶん東側にあり、南北長約1.5m、東西幅約77cm、深さ40cmの長方形土塗である。土塗セクションは木棺の痕跡を示していないかった。

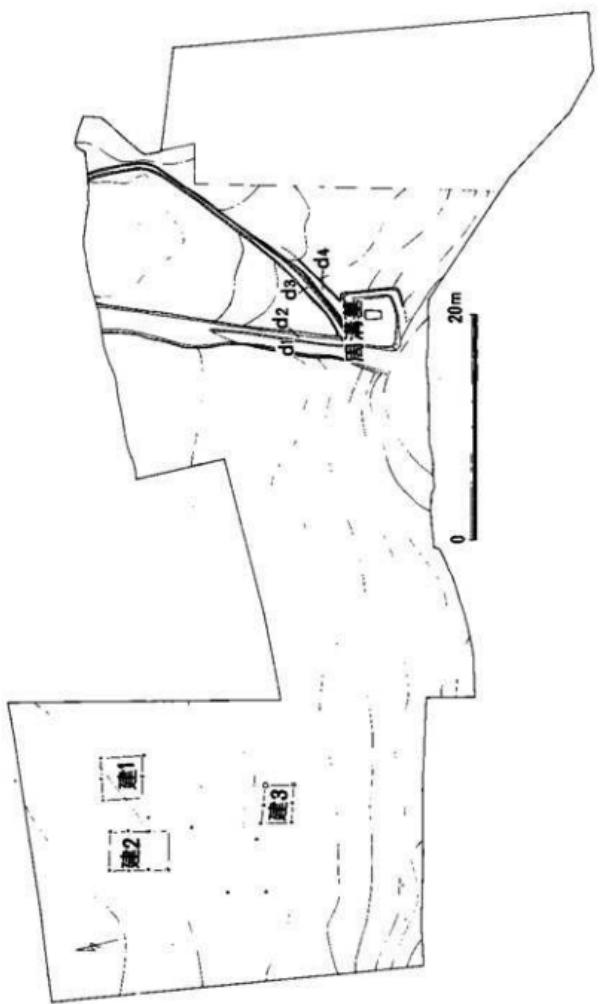
副葬品は土師小皿・壺、銅錢、漆器が頭部と推定される墓底北側に置かれていた。

溝

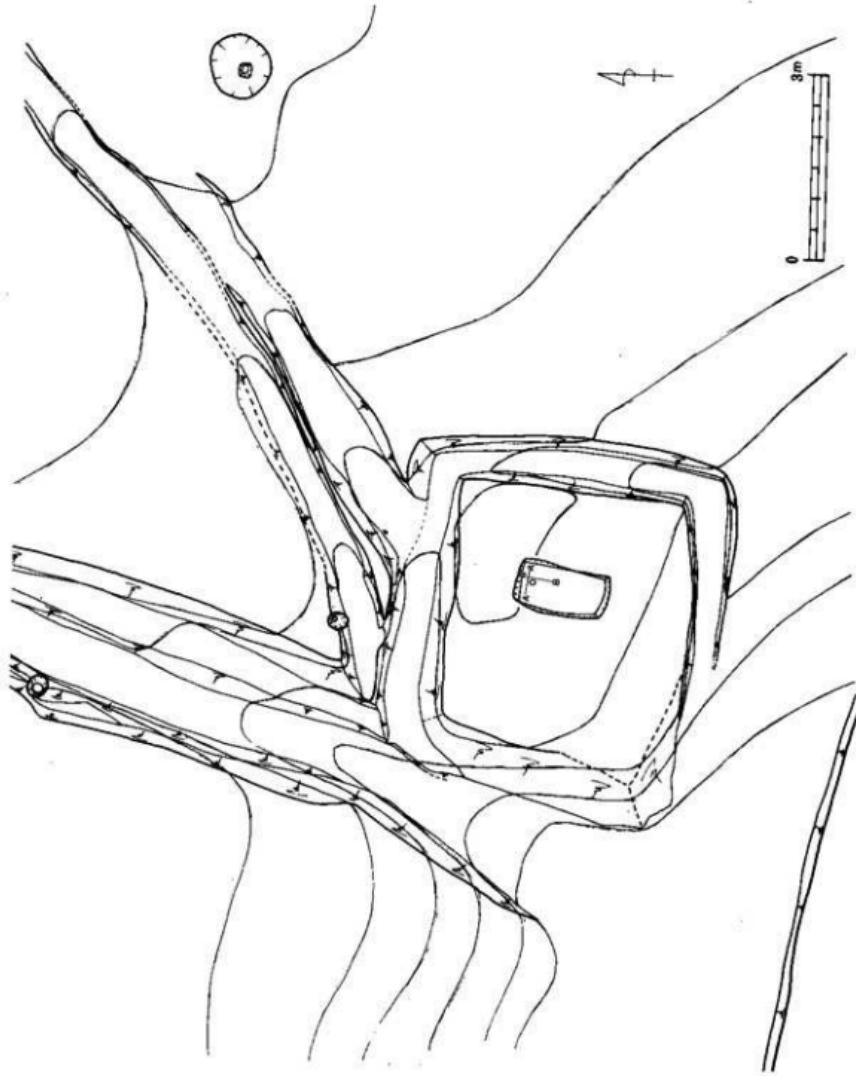
北北東から南南西に走る溝d₁、d₂と北東から南西にとおるd₃、d₄がある。この4本の溝は周溝墓北西隅で合流しており、セクション観察の結果、d₁、d₂、周溝、d₄、d₃の順に古いと判断された。溝の北半は削平されており、本来の状態を保っているのは周溝墓近辺のみである。

建物

建物1は柱穴1つを欠くが東西方向の2間（柱間1.85m）×1間（3.5m）、建物2は、これも柱穴1つを欠くが南北方向の3間（1.65m）×1間（3.5m）で建物3は東西方向の2間（1.65m）×1間（2.6m）の規模である。削平が著しく、ピット底部がわずかに残るものが多い。

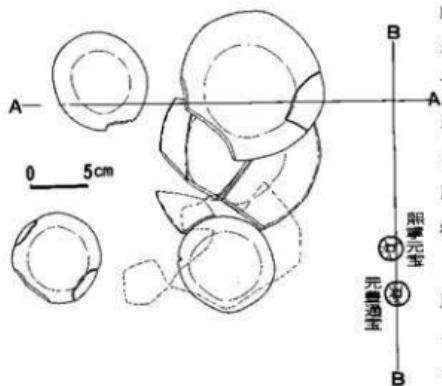


第14図 16号地遺跡遺構分布図



第15図 16号地遺跡周溝墓実測図

遺物（第17図・第18図）



第16図 16号地遺跡内部主体実測図（縮尺1/5）

土師器 第18図1と2はほぼ同型の杯で、口径13cm、底径7.5cm、器高3.5cmを測る。わずかに外反する口縁を持ち、底部は糸切底である。間に漆膜を挟み1が上に、2が下に重なった状態で検出された。3、4、5、6は小皿で、器高1~1.5cm、口径8~8.5cm、底径5~6cmの大きさである。底部はあげ底状の糸切底である。これらは底底北端、杯1・2の下に方形に配置されていた。7は東側周溝埋土出土の小皿片で器高1.7cm、口径8cm、底径6.5cmを測り1~6に比べて直立ぎみの口縁を持つ。底部は糸切底である。

銅鏡 黒寧元宝と元豐通宝及び不明銅鏡の3つが底底砂層上、副葬土師器の東におかれていった。

漆器 第18図小皿6と杯2の間に倒置されており図柄は裏がえしあつた。木質は残存してなかつたが漆膜には白泥で描かれたと思われる鶴丸が3羽認められた。

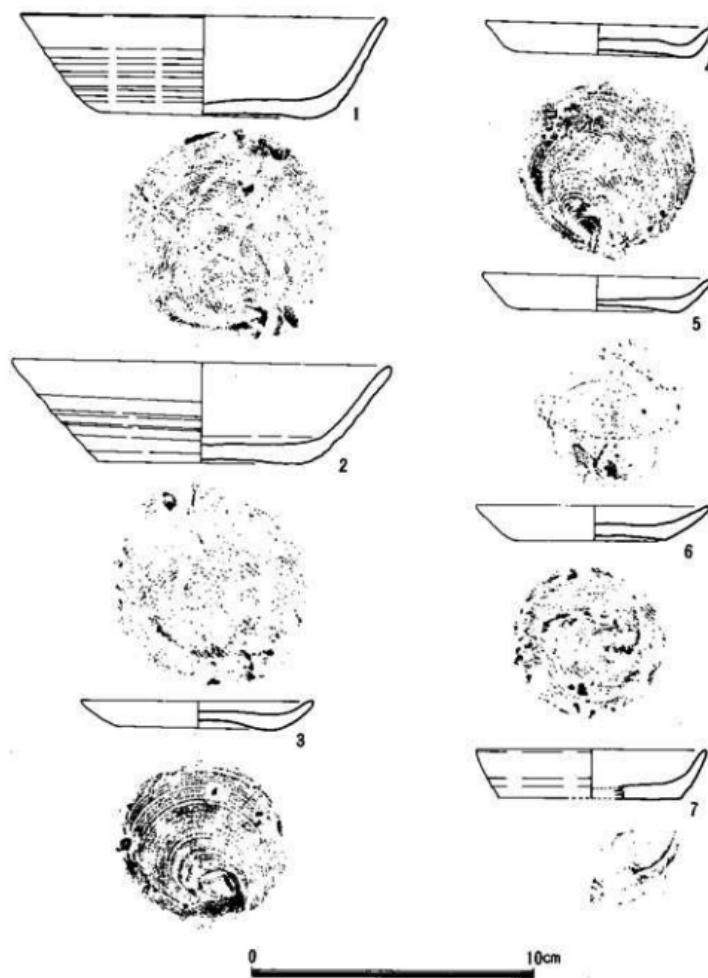
その他の遺物 図示しなかつたが周溝出土の遺物として上述の他に糸切底小皿1、墨書石1がある。溝d1~d4出土の遺物は、細片が多いが周溝墓出土土師器類似のものである。

まとめ

16号地遺跡は、遺構密度が低かったものの、周溝墓など注目すべき遺構の存在を明らかにした。周溝墓は、近年類例が増加しており、一つの墓制としての認識が確立される日も近



第17図
16号地遺跡周溝墓出土漆器鶴丸実測図
(縮尺1/2)



第18図 16号地道跡周溝出土土師器実測図・拓影（縮尺1/2）

いものと思われる。出土遺物から14世紀末～15世紀初頭頃に比定できるが、この種の周溝墓では比較的時代の下がるものである。副葬土師器を頭部に方形に配置するあり方は古代末期からの流れを持つものと思われる。建物群は、その時期は明らかにしないが、配置から3棟同時存在と考えられ、周溝墓との関係あるいは20号地遺跡との関連については調査の進展を待つとしても、当該期の倉庫あるいは住居のあり方を示す例として興味深いものがある。

（山 中 悅 雄）

5. 20号地遺跡

< A 地区 >

調査区の設定と概要

試掘トレンチを南北に入れた結果、調査区北半は赤ホヤ下まで削平されており、南半部赤ホヤ面で溝やビットが確認されたことから、調査区南半を全面的に調査することにした。耕作土を重機で排除し、黒色土を露呈させたが、遺構の確認が難しいため、黒色土を排土し赤ホヤ面までおとした。その結果、東西にはしる溝2本、南北溝3本、いわゆる花弁状住居一軒、3つの土塹、それに多数のビット群を検出することができた。ビット群については11様分の掘立柱建物と1つの柵を抽出するにとどまった。遺構はさらに東西に広がることが予想されたが、耕作等の関係上、その追求は次年度におこなうこととし、住居跡も、部分的に道路下にかかるため今年度の調査を見送った。

包含層の状態

自然地形は北に高く南に低いが、耕作に伴い北半を削平し南半に客土してある。最上層は淡褐色の耕作土、第2層に黒色系の土がはいる。第3層は赤ホヤ、第4層は黄褐色粘質土である。遺構埋土は、上層が黒色土で下層が褐色系の土であるが、部分的には黒色土のみの埋土となる。注目すべき層は文明年間に降った白色火山灰で、これは中世関係遺構の黒色埋土中から確認される。調査区北半では、赤ホヤ層まで削平が進んでおり耕作土直下ですぐに黄褐色粘質土となる。

遺構 (第19図)

建物

建物8と11を除いて東西に梁を持つ。建物1は2間(柱間約1.6m)×2間(1.6m)であるが調査区外側にのびる可能性がある。建物2は1間(2.6m)×5間(1.4~1.6m)、建物3は1間(1.4m)×3間(1.1~1.6m)であるが、P136がこの建物に伴うものならば2間×3間になる。建物4は1間(3.0m)×2間(1.9m)でさらに西側にのびる可能性もある。建物5は1間(3.0m)×1間(2.4m)だが、これも西に柱穴が存在するかもしれない。建物6は最大の建物で2間(1.6m)×6間(1.8m)の規模を持ち、半間の庇が付属するのが特徴である。建物7は1間(3.8m)×2間(2.4m)。建物8は柱穴が完全にそろわないものの1間(2.8m)×2間(1.4~1.6m)の規模になると思われる。建物9も柱穴が不足するが1間(3.8m)×4間(1.8~2.0m)の建物と考えられる。建物10

は2間（1.3m）×2間（1.6m）で東柱をもつ。建物11は、対応する柱穴が現時点では確認できなかったが、調査区外東側に柱穴を想定しておく。その場合は、1間×3間の建物になるはずである。

橋

P 22～P 27は直線的に結ぶるが、対応する柱穴が確認できず橋として扱った。

溝

東西に走る d₁、d₂ と南北に走る d₃、d₄、d₅ がある。

土塁

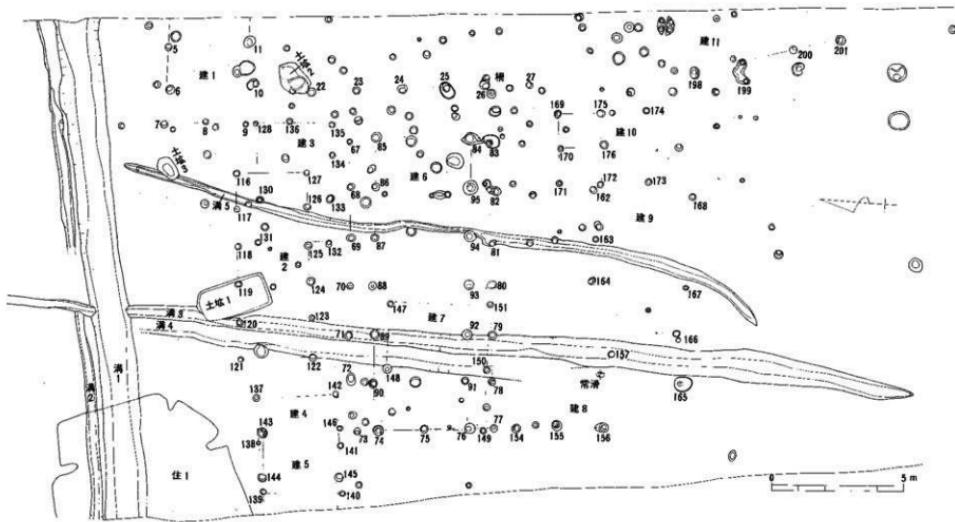
土塁1は2.6m×1.2mの隅丸長方形を呈し、深さは現存で約40cmである。溝d₃に切られおり、弥生土器と思われる破片が若干出土したが、細片のため詳しい時期やその性格については明らかにしえなかった。

住居跡

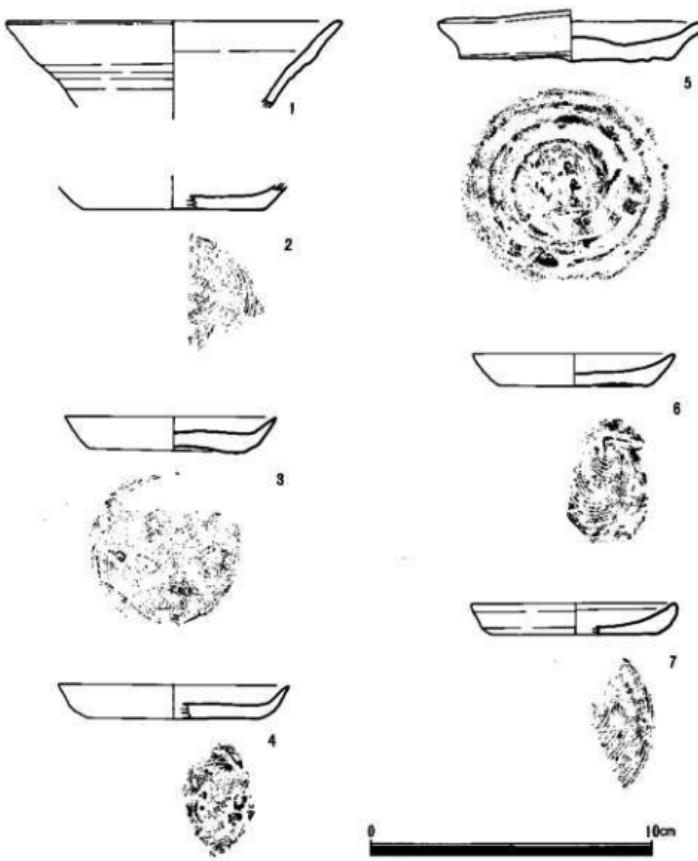
南北7.2m程のいわゆる“花弁状”住居跡である。一部道路にかかるため全体形を明らかにできなかった。未発掘である。

遺物（第20図～第22図）

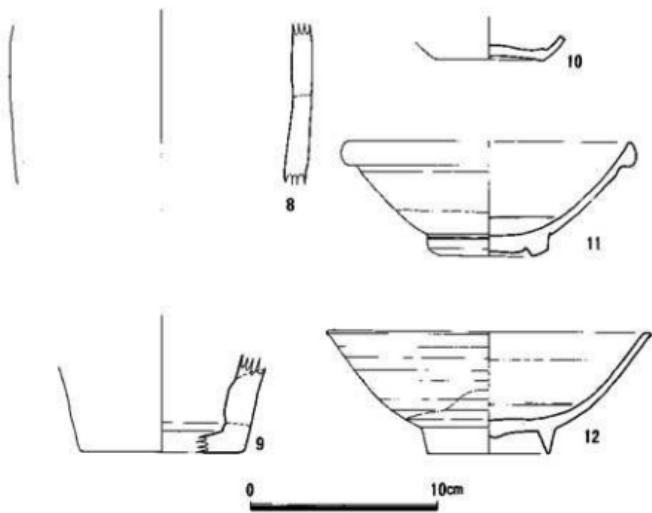
土師小皿・杯を中心として白磁碗、古瀬戸瓶子、常滑大甕などが出土した。第20図1は土師質の杯で口径12cmを測る。口縁はわずかに外反し、中央部でくびれを持つが底部は欠損している。2～7は小皿である。2、3、4、6は口縁が外反し端部はするどい。7は立ちあがりぎみの口縁で端部は丸く収まる。以上の小皿は器高1.2cm、口径7cm前後の大きさをもち、底部は回転糸切底である。5はヘラ切底を持つ口縁が外反し端部が丸く収まるタイプである。口径9.5cm器高1.5cmを測る。8、9は古瀬戸の灰釉瓶子と思われる。8は肩に近い部分で、淡緑色灰釉が施されている。9は底部で、一部淡緑色灰釉が流条化しているのが認められる。いずれも粘土巻上げによる成形である。両者は、出土地点が異なるものの同一個体の可能性がある。第21図10～12は白磁碗である。11の口縁部と底部は直接接合しないが図上で完形に復元できる。肥厚する玉縁と短い脚台を持つ。第22図13は常滑の大甕で、肩から下が欠損している。口径40cm、胴部最大径56.5cmを測る。口縁部はほぼ垂直に拡張されて2条の指ナデによる凹線が施される。1、2は柵-P 22、24出土。3、4、5、6、7は建物6-P 89、89、82、76、84出土。9は東西d₄横出土。10はP 169出土。11はP 46出土。12は黒色包含層出土。13は南北溝d₄出土である。



第19図 20号地道路A地区遺構分布図



第20図 20号地遺跡A地区出土土器実測図・拓影（縮尺1／2）



第21図 20号地遺跡A地区出土陶磁器実測図(縮尺1/3)



第22図 20号地遺跡A地区出土常滑大甕実測図(縮尺1/5)

まとめ

A地区を構成する遺構のうち、最も古い要素は花弁状を呈する住居跡である。未調査のため確実な年代は不明だが、このタイプの住居跡は宮崎県南部・鹿児島県に頻出し、最近では大分県大野川流域でも報告例がある。弥生時代中期末から終末期にかけて盛行すると考えられ、A地区検出の住居跡もその時期から大きくはずれることはないと想定される。B地区弥生後期末の住居群と密接な関連を持つ可能性が高い。

弥生時代以降では中世関係にみるべきものがある。整理中であり充分な考察を加ええないが、出土している土器のうち時期比定できるものは常滑の大甕と古瀬戸灰釉瓶子それに白磁碗がある。常滑大甕はⅢ期の特徴をもち鎌倉時代後半から南北朝時代の年代が与えられている。灰釉瓶子は鎌倉時代後半から室町時代にかけてのものと思われる。白磁は鎌倉時代のものである。土師小皿も法量が小さく、ヘラ切底のものも混じるなど16号地遺跡出土のものより古い様相をもつ。これらのことから20号地遺跡A地区は13世紀を中心として鎌倉～室町期の館などの跡と考えておきたい。

(山 中 悅 雄)

< B 地区 >

調査区の設定と概要

20号地調査区のうち、A地区とは農道を隔てて北東部に隣接する地区をB地区として調査を実施した。

調査前の表探では、弥生土器及び土師器の破片が確認されたので、調査対象地区に任意にグリッドを入れ、第一オレンジ（アカホヤ）層まで下げる結果、東側グリッドに住居跡のものと思われる黒色の落ち込みが確認できたので、確認面まで調査区全面を下げて遺構の検出を進めた。その結果、アカホヤ層上面で、単一の住居跡プラン5、土塹3、集石遺構1、溝状遺構1、柱穴群をそれぞれ検出できた。遺物は、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての土器片がかなりの量出土したので遺跡の時期をその間のものと考え調査を進めた。なお、今年度調査はA、B地区の2ヶ所のみの調査であり、両地区から東にのびる20号地全面の調査は来年度以降になるため、20号地全体の中では今回は一次調査的性格なものであり、未掘地区の調査終了後あらためて本報告で、A、B両地区を含めた20号地全体の調査結果を出したい。

包含層の状態

この地区における包含層の状態は、耕作土の下に黒色土層、アカホヤ層と続く層位を形成している。黒色土層は20~30cmの厚さがあり、溝状遺構中央部では部分的に擾乱し又は削平されており、耕作土の下に直ちにアカホヤ層があらわれる部分も見られるが、ほぼ平坦な黒色土層、アカホヤ層がのびている。ただ、北側は河川が近いため、黒色土層が傾斜する可能性も考えられるが未掘区のため不明である。遺構はほとんどアカホヤ層上面の精査によって確認でき、アカホヤ層に掘り込んだ部分を床面としている。遺物は、ほとんど黒色土層に含まれており、遺構もこの遺物を包含する黒色土層を埋土としている。この黒色土層に含まれる遺物としては、弥生土器・土師器がみられ、特に東側では頗るに含んでいる。要するに、この地区的包含層は、単純な黒色土層-アカホヤ層であり、削平、擾乱等もあまり受けていないので遺構の確認が明確にできた。ただし、中世の柱穴群については、黒色土層からの掘り込みが行われていると思われるが、これもアカホヤ層上面での確認となってしまった。



第23图 20号地遗址B地区遗物分布图

遺 構 (第23図)

1号住居跡は、一応、住居跡と名付けたが、大粒のアカホヤと黒色土が混入するプランが方形を呈しているので、おそらく、壁面は削平され、床面のみ現存する住居跡と思われる。

2号住居跡は、直列する3軒の住居跡の中で南側に位置するもので、南壁際に不明確なプランもあるが、5m×10cm程の隅丸方形を呈し、壁面はほぼ垂直に立ちあがり遺存高約30cmある。ピットについて住居跡のものは明確ではないが、径60cm、深さ70cmほどの大きさの北壁際に4つのピットの可能性もある。出土遺物は、3軒の住居跡のうちで最も多くの土器片等がある。なかでも二重口縁系の壺形土器・环部のみの高环・鉄製鋤歛先等の出土遺物はこの住居跡の明確な時期決定の資料となりうるものである。

3号住居跡は、3軒の住居跡のうちの真中にあたるもので、プランのはっきりした住居跡であった。4m程の方形を呈し、現存高約45cm、壁面も垂直に立ちあがりを見せる。床面にピットも見られるが、明確な住居跡のピットは確認できなかった。また北西コーナーに見られる長方形のプランも深さ8~10cmと、意味を明確にはできなかった。出土遺物は高环の脚部7点の他、土器片を床面、埋土中から多く見られる。また、床面直上あたりには高环の脚部を検出しておらず、これらの資料は、時期を見るうえで貴重なものである。

4号住居跡は、一番北端に位置し、農道と未掘区に一部プランを持ち、全面発掘ができなかったので、南側半分の調査にとどめた。発掘分の状況から一辺12m程の隅丸方形を呈する。また、壁添いに1m~50cm幅で10cm比高の高床部が見られる。いわゆるベット状遺構であろう。出土遺物は、壺形土器の口縁等の土器片・土製品がみられる程度で、遺物はきわめて少量である。

5号住居跡は、調査区東側の農道に入り込む形で一部プランが確認されている。4号住居跡未掘部と併せて2次調査での発掘を行う。なお、5号住居跡確認面上から石包丁が1つ検出された。

第一十広は、2号住居跡の南側に位置し、120cm径の円形土広で、現存高で60cmの面で平坦面を持ちさらに60cm径の円形落ち込みを持つ土広で、北東壁から底部にかけて、土器が流れ込む形で出土しており、土器的性質の土広と言えよう。遺物としては、壺、壺・高环等の破片・ミニチュア土器を出土している。

第二・第三十広は、調査区の西側に2つ並んで位置しており、第二十広は200cm×90cm、現存深30cmの円形プランを呈する。第三十広は180cm×110cm、現存深30cmの卵形のプランをもち、それぞれ弥生時代中期の壺形口縁部、底部を出土している。

集石遺構は、第二・第三土塹の南側に位置し、2m50cm×1m70cm、現存深30cm、の変形長方形プランの中に40~10cmの大の川原石をほぼ一重に集めてあり、周辺部には焼土もみられ石にも焼け跡がみられる。集石下部の層には炭化物、灰の混入がみられる。遺物は、江戸期と思われる備前焼・染付破片が埋土中から出土している。

溝状遺構は、調査区のはば中央を西北方向に通る遺構で、削平のためか、遺存部は浅い。幅3m、深さ30~40cmのV字溝である。遺物は、高環の环部・土鍾等がみられる。

ピット群は調査区全面に散在しており総数381個で5軒分の中世遺構が確認されている。

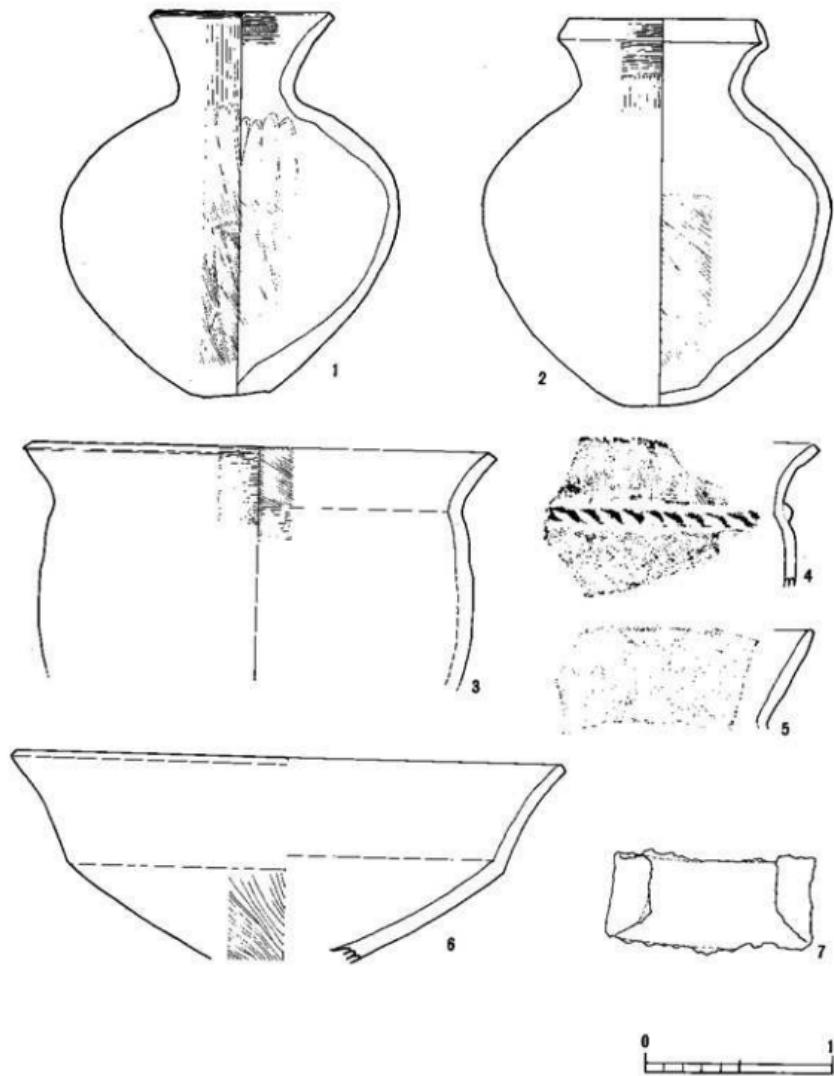
遺 物 (第24図・第25図)

2号住居跡出土の遺物(第24図)では、胸部中央よりやや上に最大径をもち、頸部が著しく、急な弧を描きながら外反する口縁と、丸味のある平底を持つ壺形土器(1)、頸部に指で調整したと思われる凹状のくびれを持ち外反する口縁の壺形土器(3)、頸部に刻印⁽¹⁾突帯を有する、いわゆる赤江式の口縁部(4)、線刻を口縁部にもつもの(5)、それと、脚部から内湾気味にたちあがりを見せ中央部で段を持ち外反しながらひろがる高環の环部(6)一枚の長方形鐵板の両端を折り返し袋部を作った簡単な構造の鉄製鎌鋸先(7)などがみられる。他に底部として平底のものや、あげ底気味の平底等が出土している。特に2号住居跡の時期を考える資料として、2のくの字に内傾する二重口縁壺は、北部九州の宮の⁽²⁾前遺跡では弥生終末から古式土師器への移行期の土器として位置づけられており、この時期の遺構と考えられるが、6の高⁽¹⁾の环部や7の鉄製鎌鋸先などの遺物が床面直上で出土したものもあり古墳時代初頭に下がるのではないかとも思われる。

3号住居跡出土の遺物(第25図1~3)では、直立気味に外反する二重口縁系の壺形土器(1)、环部の付け根部から大きく外反し裾部まで行く、はめ込み式の高環の脚部(2)、3)が特に注意したい遺物である。高環の脚部については、2、3以外にも同系の脚部が床面付近から3点出土している。1の直立気味に外反する二重口縁壺は最古の古式土師器に位置づけられており、明らかに2号住居跡出土の二重口縁壺(第24図-1)よりは新しいと考えられる。おまけに、床面近くから高環の脚部が出土したことからも3号住居跡は古墳時代初頭以降のものと考えられる。

また、北東側コーナーの壁直上から宮崎市の石神遺跡出土類似の磨製石鎌の出土も見た。⁽³⁾

4号住居跡出土の遺物(4)はきわめて数が少なく完形品もない状態であるが、そんな中で、2号住居跡や第一土塹内から出土するものと同じような、壺形土器、あるいは鉢形土器

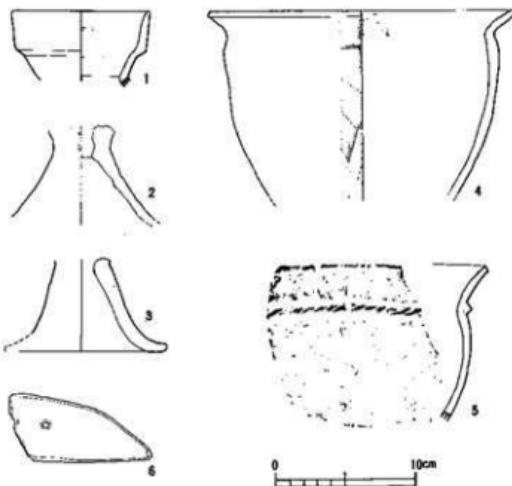


第24図 20号地遺跡B地区2号住居跡出土遺物実測図・拓影(縮尺1/3)

(4) の頸部で凹を持ち外反していく口縁部破片の出土や、球形の土製品(4cm×4.2cm)で、中央部に5mm径穿孔を持つ。

その他、5号住居跡確認から粘板岩質の穿孔2つの半月形石包丁の半分が出土している。(6)

第一十広川土の遺物(5)は、上器留め出土のため復元可能なものだけでも8個体ある。ほとんど、口縁部か、肩部付近に最大径を持ち、底部へ行く程細くなる胴部と平底あるいはあげ底気味の平底を持つ甕形土器、もしくは鉢形土器で、その中で5は、頸部に凹持ち口縁が外反するものである。外に、高さ43cmの大形の壺形土器で内済気味に立ちあがる口縁部と丸底気味の平底を持つ。大型の高台の杯部片、ミニチュア土器等多くの遺物が土塗り内に投げこまれている。この土塗りは、遺物から見て、住居跡(特に2号住居跡)出土の遺物と関係を持つような気がする。いずれにしろ第一土塗りは住居跡とそう時期差は考えられない。



第25図 20号地遺跡B地区出土遺物実測図・拓影(縮尺1/4)

第二土塗・第三土塗からは、弥生中期の壺形土器の口縁部と底部、集石遺構からは備前焼染付の破片が出土している。溝状遺構からは特に北端で布留期の高环と思われる环部が出ていている。いずれも、これらの遺物が遺構の時期決定の資料となるであろう。

まとめ

今回の調査は、概要でも述べたように、20号地全体の調査でなく、西側のA、B両地区的調査にとどまった。そのため、調査した住居跡も3軒のみで群としての把握がむずかしく、弥生時代終末から古墳時代初頭の土器類を住居跡から出しているにもかかわらず、まだ量が少ないためまとめることができなかった。しかし、B地区の東側地区一帯に20軒近くの住居跡プランが確認されており、今回の3軒とあわせ同時期の住居跡群が広がっており、2次調査で20号地区の全様が明らかになり、今まで乏しかったこの時期の資料もそろい土器編年指標を与えてくれるであろう。そこで、今回の調査は1次調査という形でとらえてもらいたい。

さて、そこで問題になるのは、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての遺物を出土する住居跡について、特に2号住居跡と3号住居跡の年代について、遺物の項でも述べたように、二重口縁壺と高环の形式から時期が考えられるのではないか。二重口縁壺については、前述の宮の前遺跡報告の中に、①口縁部がくの字に内傾するもの（宮の前Ⅰ：弥生終末期）②直立気味に外反する（宮の前Ⅱ：最古式土師）③大きく外反するもの（宮の前Ⅲ）との編年がなされており、2号住居跡出土の壺形土器は宮の前Ⅰに、3号住居跡出土の壺形土器は宮の前Ⅱに相当するものと一応考えられる。しかし、宮の前遺跡の二重口縁壺の口縁部は20号地B地区出土のものより広口のものであるので、一概にあてはまるとは断定できない。ただ、3号住居跡では土師器の様相を持つ高环の脚部が床面から出土していることなどから古墳時代初頭、2号住居跡に関しても、明らかに土師と思われる高环の环部、それに鉄製鋤歛先が床面から出土していることなどやはり古墳時代初頭の遺構としてとらえるのが妥当と思われる。また4号住居跡については資料が少ないため明確には断言できないが、2、3号住居跡とさほど違いはないであろう。そうなると、2号住居跡出土のいわゆる“赤江式”的後期弥生土器の位置づけも考えなければならないであろう。

（永 友 良 典）

註

- (1) 小田富士雄 「考古学ジャーナル 83. 1973 入門講座 勝生土器 九州 5.」
- (2) 「宮の前遺跡（A～D地点）」 福岡県労働者住宅生活協同組合 1971
- (3) 「石神遺跡」 宮崎市文化財調査報告書第1集 宮崎市教育委員会

6. 23号地石塔群

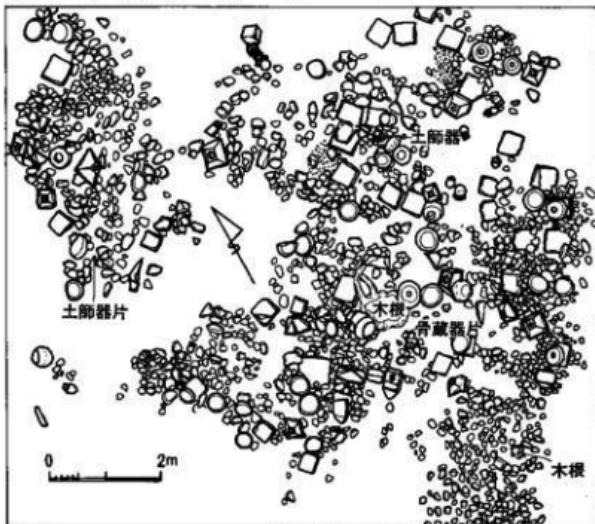
調査区の設定と概要

23号地石塔群は北西方向に、三指に別れて突出した丘陵地の中央丘陵を中心として、山腹から裾野にかけて広がっている。4、5基ないしは10数基の石塔及び石碑が露出している箇所を含め10箇所程の窪みが山腹から裾野にかけて確認されていたため、杉林伐採の後窪みを中心として発掘を進めた。このうち上位数箇所の窪地からは石塔類は確認されなかったが、数基の石塔類の露呈がみられた中位以下の窪みは、山腹を削り平坦面を整地し多数の石塔類を配置したものであることが確認された。

石塔群は7区ないしは8区に分けられ、糸切り底の环、骨蔵器片、古錢等が検出されている。

遺 墓 (第26図)

各区は、山腹から裾野にかけて3段ないしは4段に山腹を削り整地した平坦面を中心に石塔類を配置している。中央上段の区域には顕著に認めることは出来ないが、西区上段から中



第26図 23号地石塔群出土状態実測図（西区群の一部）（縮尺1/100）

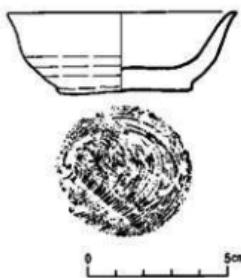
段及び東区中段から下段にかけては、拳大から幼児頭大の河原石を葺石状に配した配石が認められる。

遺物（第27図、第28図）

石塔類の内主たる位置を占めるのは五輪塔で、上段から中段のものは小型で、下段に数基の大型のものが認められる。板碑については、その数は少ない。最下段の石碑の銘文に寛永・慶安・承応のものがあるが、それは石塔群全体の营造年代からすれば中葉ないし後葉に位置するものであり、五輪塔の一部は南北朝にさかのぼる可能性がある。

土器類では糸切り底を主とした素焼きの壺及び皿があり、第27図は口径 8.2 cm、底径 4.8 cm、高さ 2.8 cm を測る。

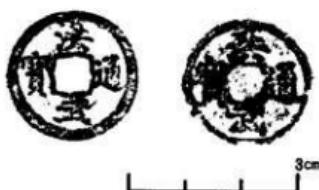
第28図の古銭は西南区上段からの出土で、2枚とも「洪武通宝」である。径は共に 2.3 cm を測る。



第27図 23号地石塔群
出土土器実測図・拓影（縮尺 1/2）

まとめ

23号地石塔群の調査は年度末に及んだためその整理はいまだ充分ではない。出土遺物、石塔類の詳細は本報告にゆずるしかないが、同地の寺跡としての来歴もまた現在のところ充分な資料を欠いている。「日向地誌」（平部信南著）によれば、同地周辺に比定される寺跡として「勢田寺址」の名がみえ、「勢田頼成就守ノ末派ナリ黒坂ママ勢田堂ノド池ノ上ニアリ右八十二ノ寺院アリト云ヒ伝？頗ル大加藍ナリシト見ニ明治五年壬申廢ス今山林トナル」とある。一説によれば、23号地の北西に面する丘陵地がそれと言われるが、記述に従えば23号地の丘陵地もその範囲に含まれる可能性もあり、なお資料の調査を継続したい。



第28図 23号地石塔群出土古銭拓影

（北郷泰道）

IV、結語

未だ断片的ではあるが、宮崎学園都市建設予定地内に確認された遺跡群の流れを概括的にまとめておきたい。

先土器時代の遺構・遺物はまだ現在までのところ確認されていない。しかし、試掘調査等の結果では、丘陵地上に発見される可能性が高くなっている。清武川を挟み北方に面する
清武町辻遺跡からは、疊を含む淡黄色粘質土層の上面で三稜尖頭器などが確認されており、それに対応する層位、立地等を試掘調査の結果遺跡群の二・三について指摘出来る。⁽¹⁾

縄文時代の遺構・遺物は、昨年の5号地・11号地遺跡に続き7号地遺跡でとらえることが出来た。おおよそB.P.6300年頃の鬼界カルデラを起源とするアカホヤ火山灰が、ことに南九州の縄文時代の流れの中に大きな節目を刻み込んだことは間違いない。アカホヤ下位から出土する塞ノ神式、前平式などと、アカホヤ上位から出土する轟式・曾畠式などとが異文化的様相をもつことを指摘し、そこにアカホヤ火山灰を鍵層としての縄文時代の節目を認めることが出来るならば、早期と前期という画期を置くことが可能となる。しかし、関東地方にまで及ぶこの広域テフラを列島弧を横に貫く時間尺とした上で、あらためて地域性・地域差の問題が問われねばならず、土器型式論の上からはまず早期と前期の概念を明確に定義付ける必要がある。この問題について若干の見通しを述べるならば、代表的にはいわゆる塞ノ神式といわれる土器の多様さには、時期的先行の認められる前平式・吉田式などとは比べ得ないものがあり、土器型式論からそこにも一つの画期を見出すことが出来る。⁽²⁾

ここでは貝殻条痕瓦及び押型文土器を伴う集石遺構を早期のものと把握する。昨年の5号地遺跡に次いで検出された7号地遺跡の集石遺構は、石蒸し的機能を持つものと解されるよう、県下でも野尻町梯遺跡で発掘されて以来次第にその位置付けが明らかになりつつあり、集石下位に土塗をもち炭化物を伴うことが確認されている。しかし一方では、辻遺跡の例などのように集石下位に明瞭な土塗の認められないものもあり、周辺に多数散乱して認められることの多い疊石の存在とあわせて、集石遺構の形成といった動態的問題にも視点を考えておきたい。⁽³⁾

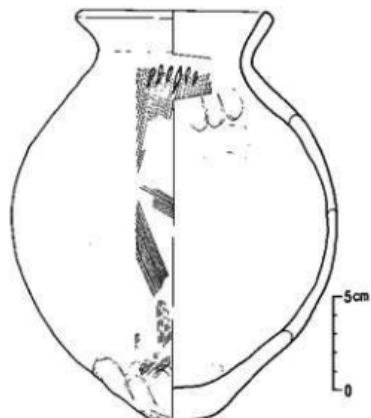
縄文後・晩期に関する遺跡は、遺構の確認は出来なかったが昨年の11号地遺跡があり、試掘調査の結果では他に大規模な遺跡地の存在も確認されつつある。これらの遺跡は、周辺の参考遺跡として上げておきたい海浜部の松森貝塚と並行あるいは一部時期的な重なりをもち形成されたものとみられ、この面での立体的理解も期待したい。⁽⁴⁾

弥生時代前期にこの地に入々の足跡が印されたか否か未だ明らかとし得ないが、弥生中期には11号地・20号地遺跡にその遺構と遺物が認められる。軽石製の男根型石製品を伴った11号地遺跡の住居跡、プランこそ明瞭さを欠いたが石皿と磨石を床面から出土した20号地遺跡の住居跡、そして土塗の存在などは、台地の縁辺部から台地中央の丘陵地上に人々の生活が広がっていったことを示している。当該期の生産基盤を追求すべくプラントオバール分析も進めているが、水田の存在追求とともに畠地耕作の存在も考えたい。

弥生後期～終末に至ると、この地にも新しい時代の波が打ち寄せ、14号地遺跡に方形周溝墓が出現する。現在1基を確認したのみであるが、近接する畠地の試掘で方形周溝墓出土と同タイプの線刻文をもつ完形の壺形土器（第29図）が溝状の遺構から出土しており、全容はまだ明らかでないが、周辺地に方形周溝墓が遺存する可能性がある。現在、方形周溝墓及び円形周溝墓は県下では郡城市年見川遺跡、川南町東平下遺跡で確認されており、確実には東平下遺跡の円形及び方形周溝墓と14号地遺跡の方形周溝墓との間に繼起的関係を指摘することが出来る。柳描波状文及び横線文を施す二重口縁壺そして短頸壺を相瓦の共通項として挙出

する時、柳描波状文二重口縁壺では、14号地遺跡の方形周溝墓出土例に対し、東平下遺跡方形周溝墓出土例は袋状口縁に近く明瞭な二重口縁部の屈折がみられず、また胴部も比較的肩の張ったものである。さらに短頸壺では、外反する口縁部の屈折及び胴部の張りに明瞭な差違が認められる。一方東平下遺跡円形周溝墓は、装飾高环、球体の副部に直線的に開く口縁をもつ壺形上器など良好な資料を出土したが、その内横線文二重口縁壺が14号地遺跡出土例との共通項となり、それは14号地遺跡出土例に比して横線文が不明瞭なものとなっている。

又、県下でのこの時期の土器資料も近年増加しつつあり、野尻町大荻遺跡・郡城市丸谷遺跡・祝吉遺跡等の内陸部の代表的な遺跡を上げることが出来、とくに大荻遺跡が土塗墓



第29図 14号地遺跡B地区
試掘調査出土壺形土器実測図（縮尺1/3）

を中心とした遺跡であるため最も参考となろうが、これらの幾つかの遺跡はまた線刻文（絵画）土器でも一つの共通項が結ばれ、14号地遺跡方形周溝墓出土例にみられた線刻文（絵画）⁽¹⁴⁾の位置付けも、畿内地方との関係も含め広域的な問題となろう。今回の発掘調査では、他に14号地遺跡住居跡及び20号地遺跡からも線刻文（絵画）土器が出土している。

古墳時代に入り、20号地遺跡では引き続き集落が営まれる。2号住居跡の床面で検出された鉄製鍛錬先は、良好なセット関係を保った土器群の存在と共に、今後第2次調査として発掘を行うことになる。現在確認されている数十箇の住居跡群の調査に期待をつなぐものがある。この時期台地下に木花古墳群（総数8基、うち前方後円墳3基）⁽¹⁵⁾が营造されているが、現在清武川の上・中流域の田野町灰ヶ野地下式横穴付近まで存在の知られている日向在地型の墓制である地下式横穴の清武川下流域における空白といった問題も含め、当該期の提起する問題は多い。

さらに弥生時代～古墳時代にかけての土器論についても、現在までに弥生中期土器から土師器までの存在が知られ、ことに弥生後期～終末期に位置付ける土器類の確定は必須の課題であろう。しかし、20号地遺跡で確認されている、從来弥生後期に位置付けられている赤江⁽¹⁷⁾遺跡出土土器に類するタイプの刻目突帯土器の再検討を含め、今しばらく時間的猶予が必要である。

平安時代前半のものと思われる7号地遺跡に検出された煙道をもつカマドを付帯する竪穴住居跡及び2棟の桁行3間×梁行2間の掘立柱建物は、この時期の資料に新たな知見を広げた。竪穴住居跡出土のヘラ描きによる「大」の字を刻み込んだ环の存在は特記されてよいし、煙道をもつカマドは、日向におけるこの種の出現期のものである7世紀代の浄土江遺跡例に対し、1～2世紀の間にスス溜めを掘り込むなど構造上のかなりな発展をとげたものと理解される。

12世紀中頃この地を含む一帯で莊園の開発が開始される。その國富莊は宮崎平野を貫流する大淀川の河南、河北にわたったが、中心地とされる宮崎市大字本郷南方は20号地遺跡の立地する台地の北東約4kmの平野部である。『延久図田帳』『宇佐大鏡』によれば、中心地「國富本郷」の南に接する20号地遺跡を含む一帯は「隈野」（現在の地名は熊野として残っている）⁽¹⁹⁾と呼ばれている。20号地遺跡に検出された桁行6間×梁行2間に半間庇をもつ東西棟切妻造りの掘立柱建物をはじめとする13～14世紀の住居遺構は館跡とも呼んでよいし、次に述べる中世の周溝墓と共に、中世から近世へかけての日下部氏、伊東氏、上持氏、島津氏らの興亡史を考古学的に位置付けるものとなろう。

中世～近世にかけてのこの地の歴史の流れの中で、16号地遺跡に周溝墓が築かれたのは14世紀末～15世紀初頭のことであった。福岡県佐玄社遺跡、千渕遺跡などにおいても中世～近世に下る円形・方形の周溝墓の存在が知られているが、陵墓変遷史において指摘される10世紀前半の醍醐天皇陵も形状的にはこの種の周溝墓に類似するものと思われ、墳墓の形態が仏教思想等の影響を受けつつ大きく演進していく時代の中で生み出されたものといえる。

墓塚内から検出された糸切り底の环・小皿、「元豊通宝」等の北宋銭、そして漆器のみの遺存ではあったが鶴丸を白泥顔料で筆書きした漆器の存在は注目しておきたい。

近世に至り、23号地石塔群が宮造されたが、一部南北朝にさかのぼる可能性のある五輪塔の存在などなお今後調査を進めねばならないが、筑前街道近く立地する同地が交通の要所の中でも果した役割についても考えておきたい。

(北郷泰道)

註

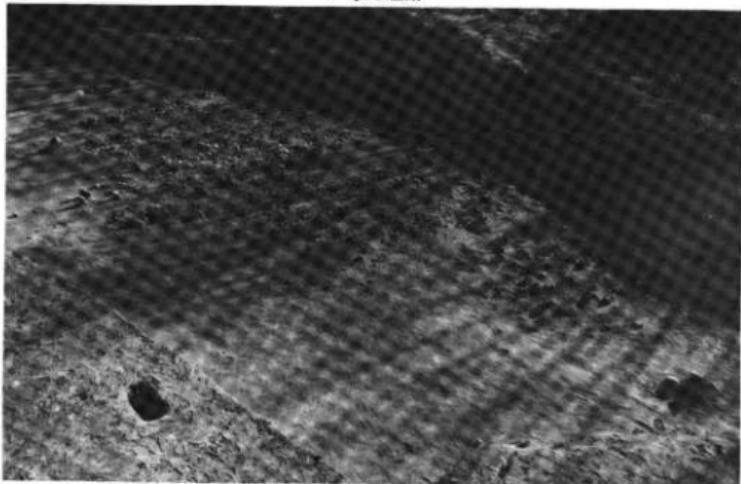
- (1) 北郷泰道・長津宗重『辻遺跡』清武町教育委員会(昭和55年)
- (2) 岩水哲夫・北郷泰道『宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概要(1)』宮崎県教育委員会(昭和56年)
- (3) 斎田 洋「繩文土器文化に与えた火山活動の影響」『地塊』Vol. 26 No. 9(昭和56年)
同「火山灰は語る」
- (4) 新東晃一「火山灰からみた南九州縄文早・前期土器の様相」『鏡山猛先生古稀記念古稀記念古文化論叢』(昭和55年)
同「南九州の火山灰と土器形式」「どるめん』No.19(昭和53年)
- (5) 新東晃一氏が指摘されるように、早期の押型文土器、燃系文土器、其穀文円筒土器と大きく三つに別けられる一群の後に、窓ノ神式土器が分布層の上でも大きく南九州一円をおおい出現している。これを繩文土器の早期的様相の終末とするか、前期的様相の初源とするかにおいて見解が大きく別れよう。
- (6) 面高哲郎「梯遺跡発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第24集(昭和56年)
- (7) 鈴木達治・石川恒太郎『松添貝塚』宮崎市教育委員会(昭和49年)
- (8) 先の報告では輕石製石碑の呼び方を採用したが、森貞次郎氏から男根型石製品とした方が適切ではないかとの御指摘を受けた。

- (9) 石川恒太郎『宮崎県の考古学』に概要のみを知るだけで、正式な報告書は出されていないが、方形周溝墓の存在が別に指摘されている。
- (10) 円形・方形の2基の周溝墓が発掘調査されており、いずれも未報告であるが、方形については本年度川南町教育委員会から、円形については来年度県教育委員会から報告書刊行の予定である。
- (11) 石川恒太郎・日高正晴ほか『大秋遺跡』(1)、(2)宮崎県教育委員会(昭和50、51年)
- (12) 須高哲郎「丸谷第1遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』(3)宮崎県教育委員会(昭和55年)
- (13) 北郷泰道『祝吉遺跡』都城市教育委員会(昭和56年)
- (14) 佐原 真「弥生時代の繪画」『考古学雑誌』第66巻第1号(昭和55年)
- (15) 長澤宗重・北郷泰道「首長墓の系譜」「宮崎考古』第6号(昭和55年)
木花古墳1号前方前円墳から円形透孔とコ字形突堤を有する円筒埴輪片を表探している。
第V期(川西宏幸『円筒埴輪総論』『考古学雑誌』第64巻第2号)に相当するものであろう。
- (16) 石川恒太郎「田野町灰ヶ野地下式古墳調査報告書」「宮崎県文化財調査報告書」第17集 宮崎県教育委員会(昭和48年)ほか
- (17) 小田富士雄「赤土土器—九州5—」『考古学ジャーナル』No.83(昭和48年)ほか
- (18) 野間重季『淨土江遺跡』宮崎市教育委員会(昭和56年)
- (19) 日高次吉『宮崎県の歴史』(昭和45年)ほか
- (20) 松岡 史、龜井 勇『福岡県柏玄社遺跡調査概要』(昭和43年)
- (21) 橋口達也・横田賢二郎・森田勉『千鶴遺跡I』福岡県教育委員会(昭和55年)
- (22) 和田軍一「陵墓」『日本考古学辞典』日本考古学協会編

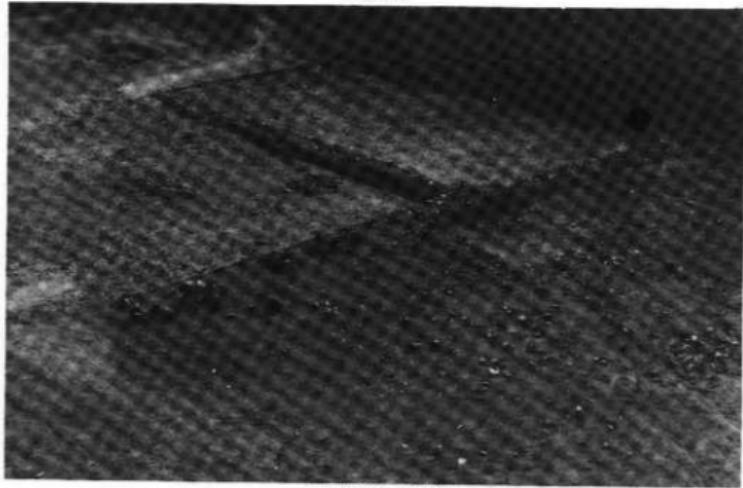
図 版

図版 1

7号地遺跡



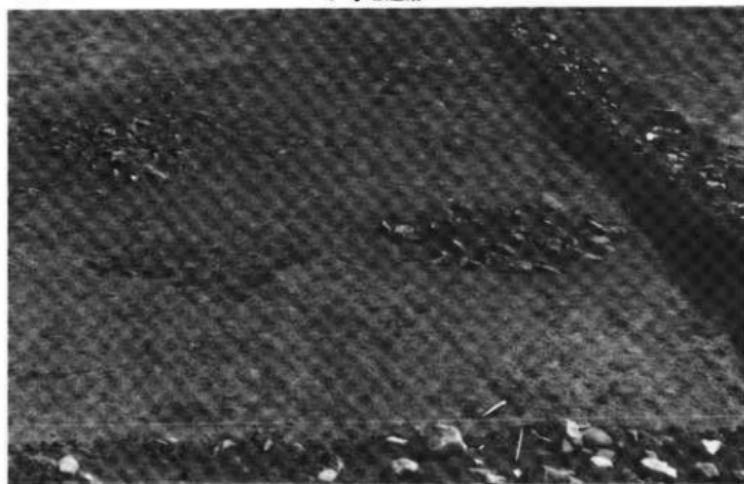
石群



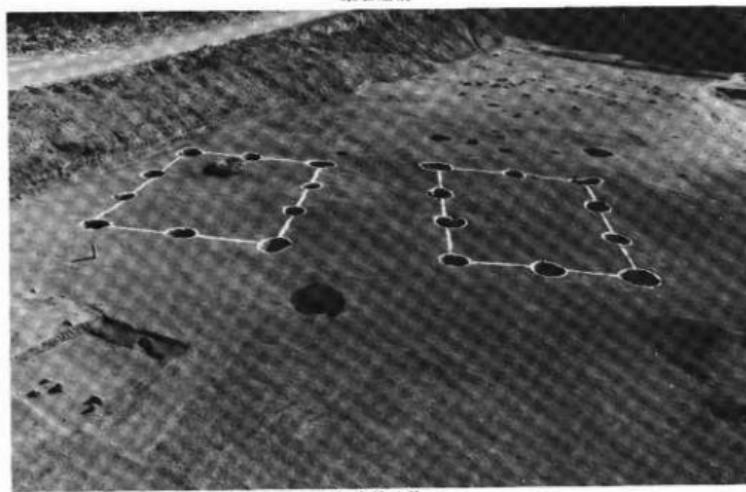
石群と集石道橋

図版 2

7号地遺跡



集石遺構



据立柱建物

図版 3

7号地遺跡



1号竪穴住居跡



1号竪穴住居跡

図版 4

7号地遺跡



1号堅穴住居跡カマド



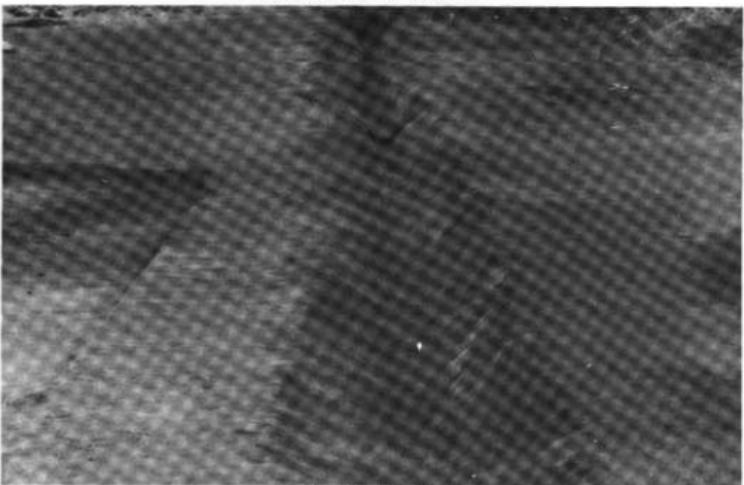
1号堅穴住居跡坏出土状况

図版 5

7号地遺跡



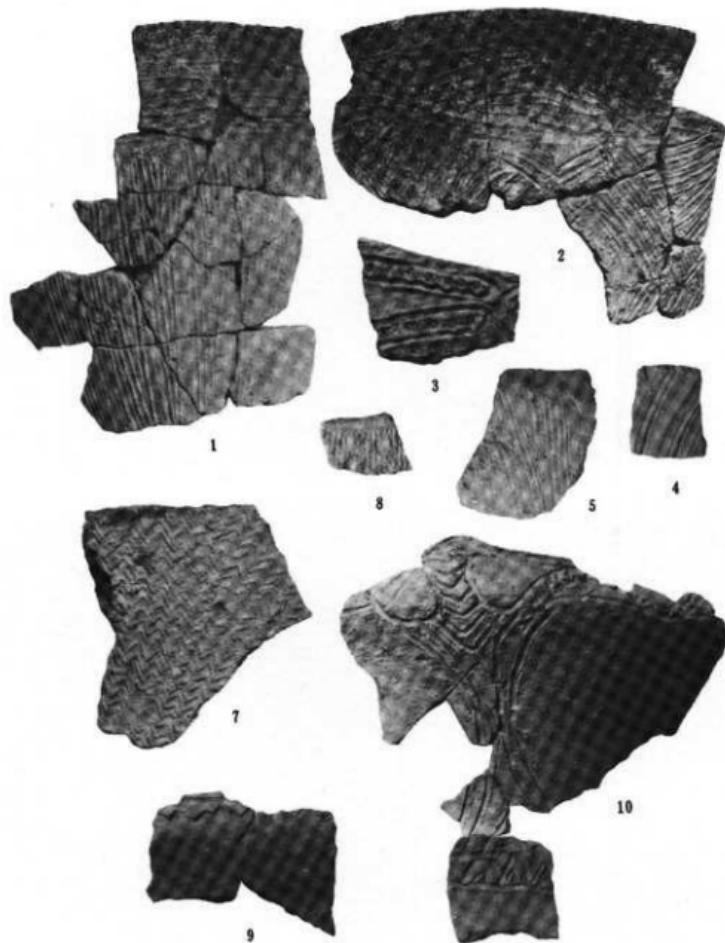
西端溝状遺構断面（南から）



西端溝状遺構（北から）

図版 6

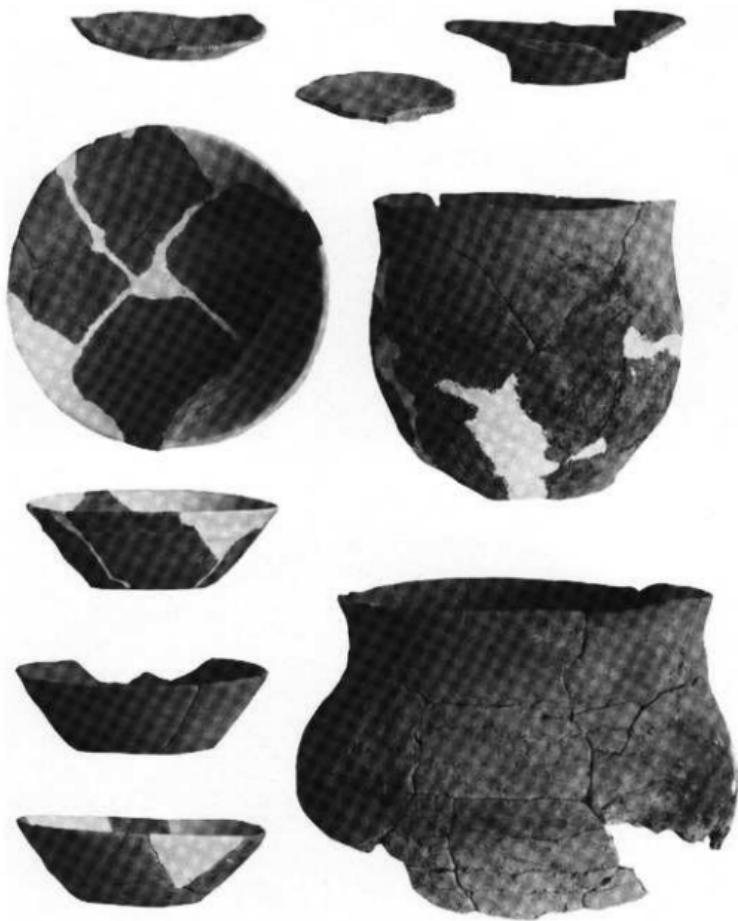
7号地遺跡



出土縄文土器

図版 7

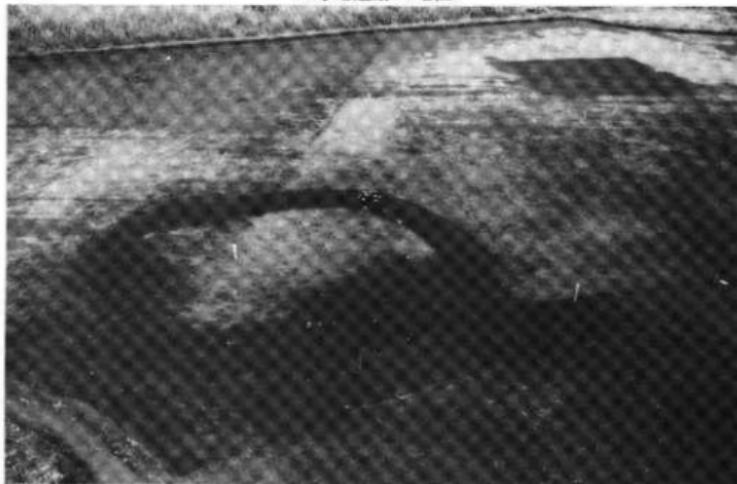
7号地遺跡



出土遺物

図版 8

14号地遺跡 A 地区



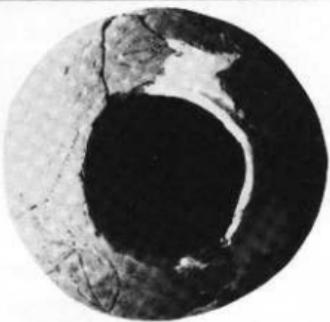
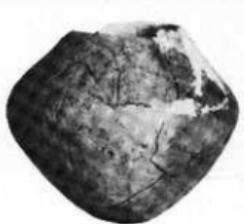
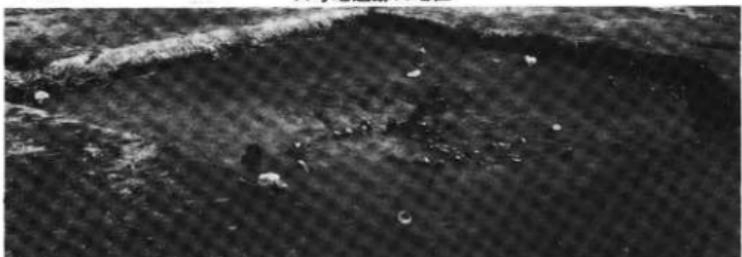
方形周溝墓及び 1 号住居跡発掘前状況



方形周溝墓遺物出土状況

図版 9

14号地遺跡 A 地区



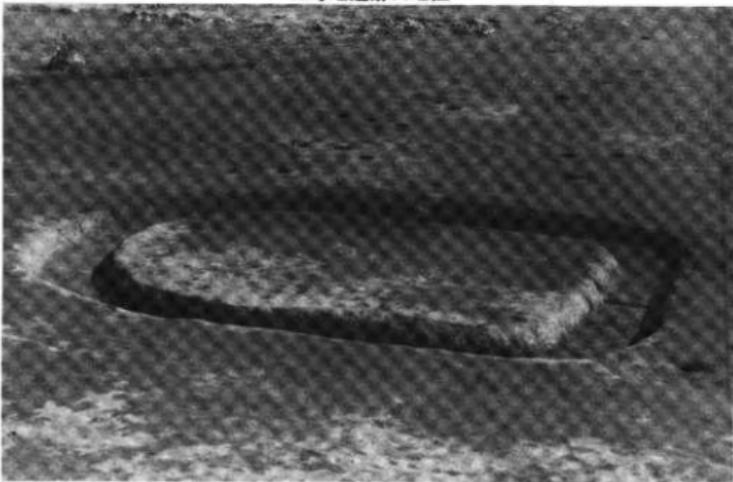
1号住居跡及び出土線刻文壺形土器



2号住居跡

図版10

14号地遺跡A地区



完掘後の方形周溝墓及びピット群



全景（西から）

图版11

14号地遗迹A地区



方形周溝墓出土遗物



1号住居跡出土遗物

图版12

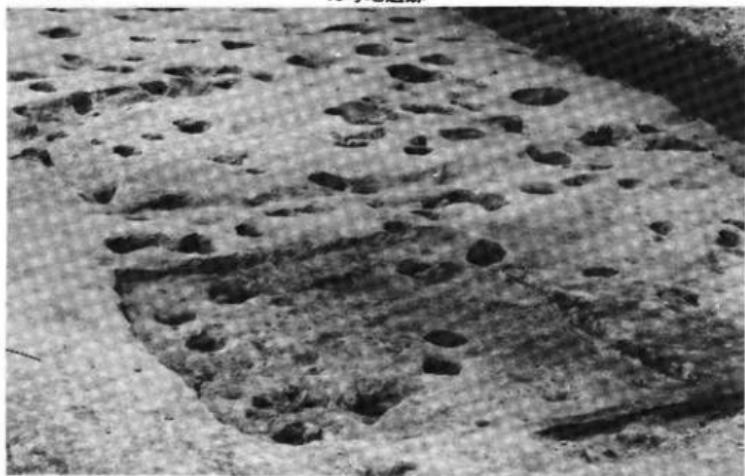
14号地遺跡A地区



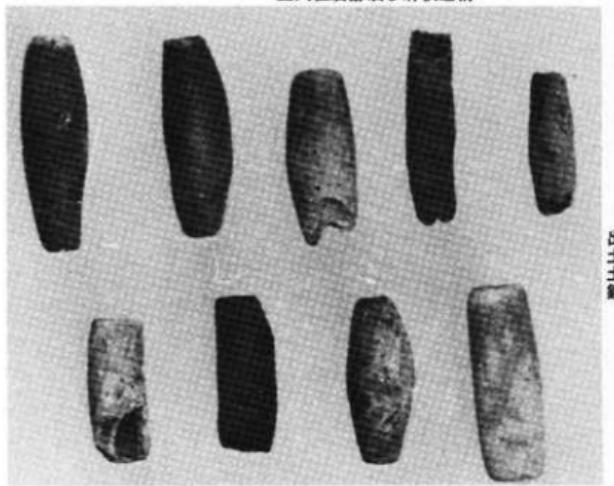
方形周溝墓出土線刻文壺形土器

図版13

15号地遺跡

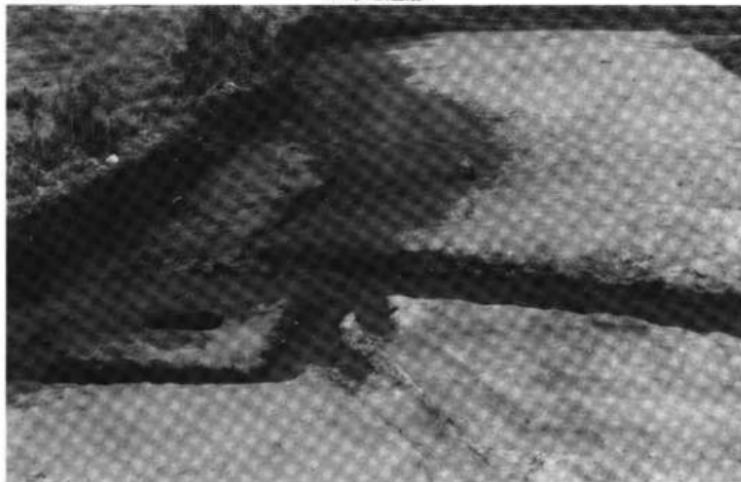


整穴住居跡及び溝状遺構



図版14

16号地遺跡



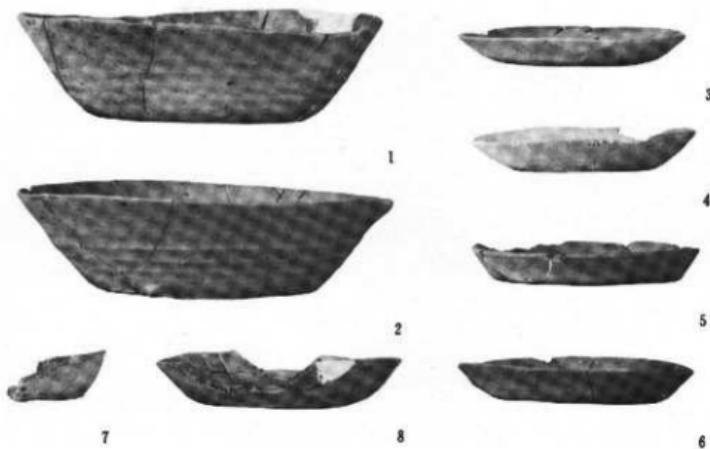
周溝墓及び溝



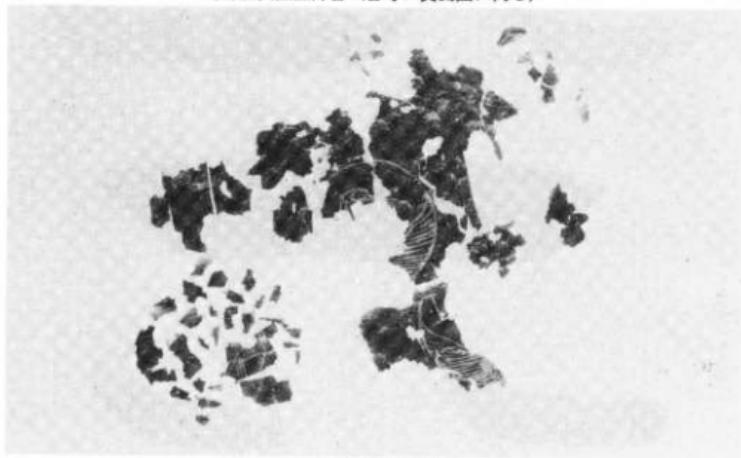
周溝墓副葬土師器出土状況

図版15

16号地遺跡



周溝墓出土土師器（番号は実測図に同じ）



周溝墓出土漆膜

図版16

20号地遺跡A地区



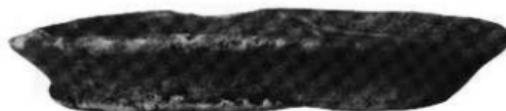
全景（北から）



2



3



5



6



7

出土土器（番号は実測図に同じ）

図版17

20号地遺跡A地区



8



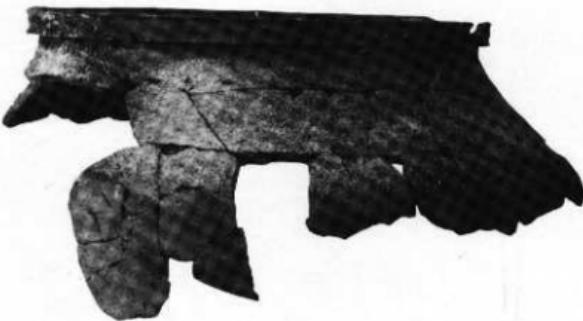
12



9



11



13

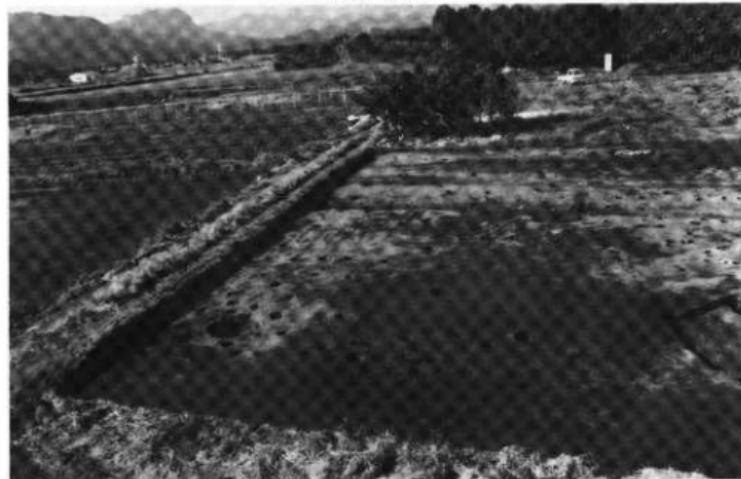
出土陶磁器（番号は実測図に同じ）

図版18

20号地遺跡B地区



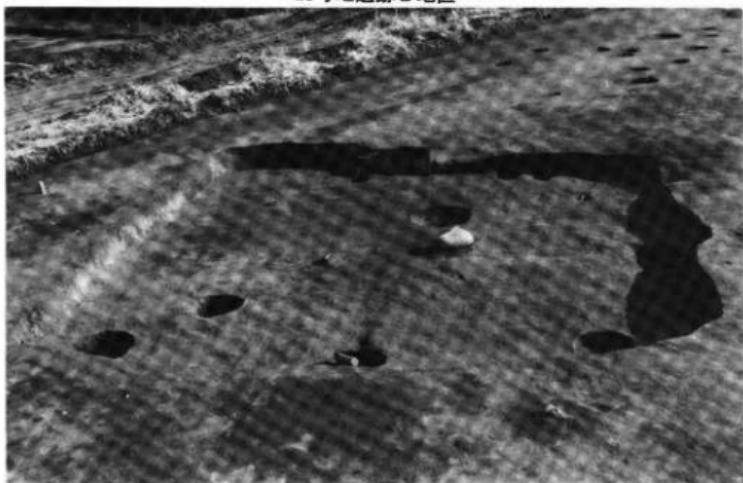
全景（北側）



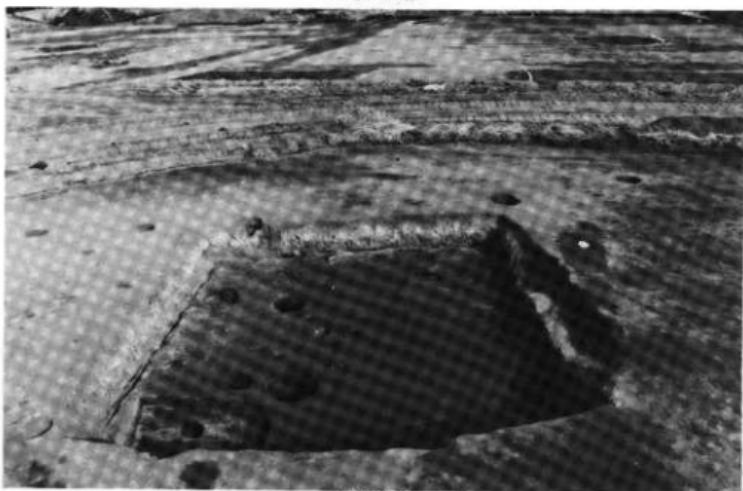
全景（南側）

図版19

20号地遺跡B地区



2号住居跡



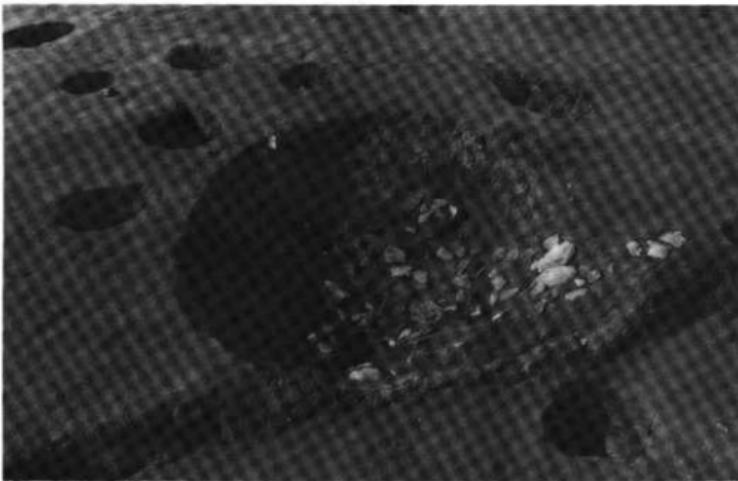
3号住居跡

図版20

20号地遺跡B地区



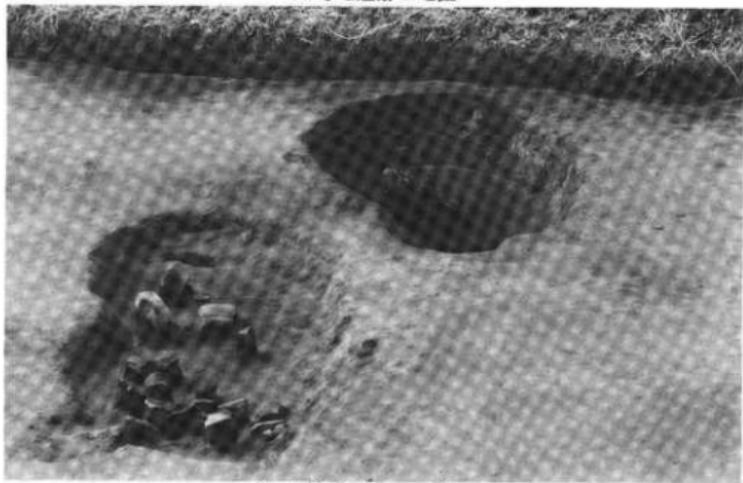
4号住居跡



第1土塁

図版21

20号地遺跡B地区



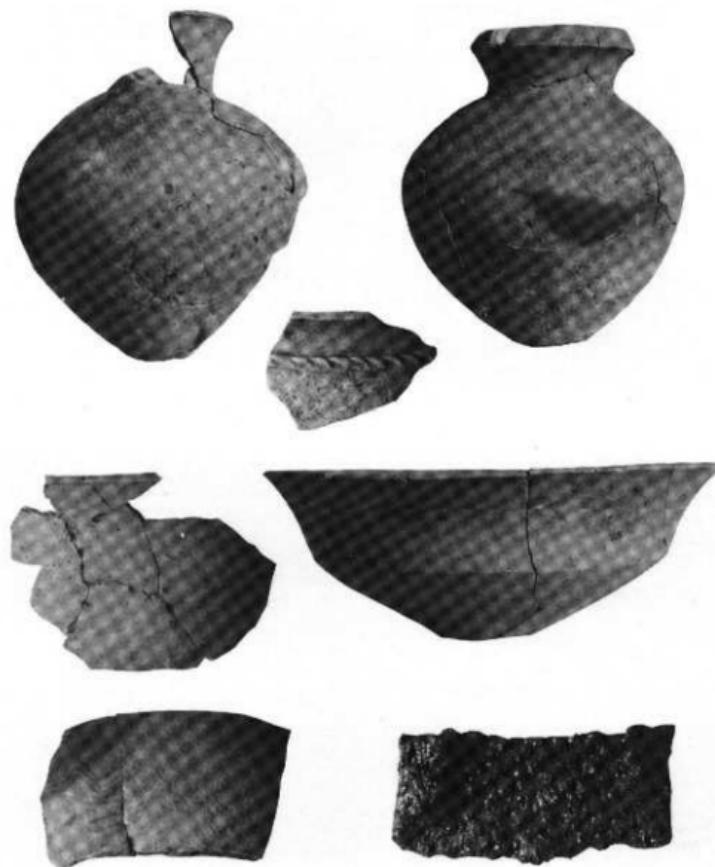
第2土塚（左）第3土塚（右）



集石遺構

図版22

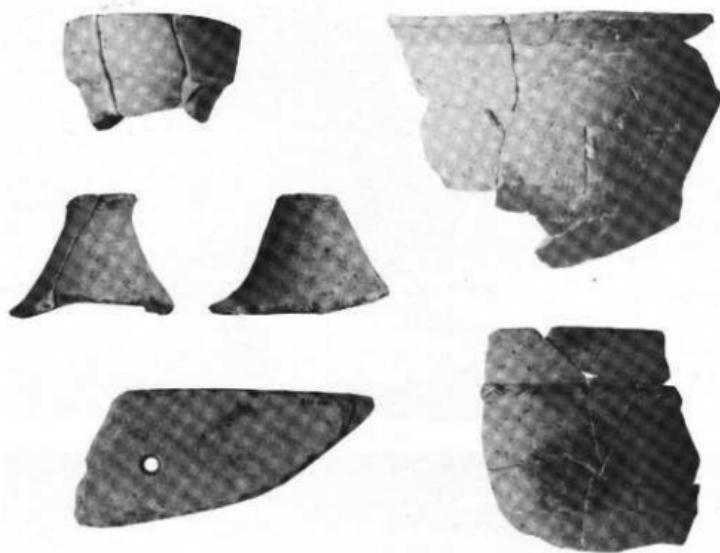
20号地遺跡B地区



2号住居跡出土遺物

図版23

20号地遺跡B地区



出土遺物

図版24

23号地石塔群



西区群全景



中央区群全景

出土糸切り底

301

宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報(Ⅱ)

発行年月日 昭和57年3月31日

編 集 宮崎県教育厅文化課

発 行 宮崎県教育委員会